

青森県埋蔵文化財調査報告書 第633集

林ノ脇遺跡Ⅱ

— 国道279号横浜北バイパス道路改築事業に伴う遺跡発掘調査報告 —

2023年3月

青森県教育委員会



調査区全景（上が北・下の2019年度調査区との合成・白枠内が調査区）

口絵 1 調査区全景



遺跡空中写真（南東→・釜臥山を望む）



第18号溝跡（東→）

口絵2 遺跡空中写真

序

青森県埋蔵文化財調査センターでは、令和3年度に国道279号横浜北バイパス道路改築事業予定地内に所在する林ノ脇遺跡の発掘調査を実施しました。

本遺跡は、横浜町太郎須田地区の海に面した段丘上に位置しており、陸奥湾の向こうに釜臥山を望むことができます。令和元年度の調査で縄文時代早期前葉の土坑と遺物集中地点、縄文時代中期後葉～後期前葉の溝状土坑、弥生時代後期の竪穴建物跡の他、平安時代の多数の竪穴建物跡等が見つかっています。

今回の調査においても、縄文時代及び平安時代の遺構と遺物を確認しました。特に、平安時代の溝跡は、集落を区切る境と考えられ、屈曲した張り出しが認められる特異な形態であることが注目されます。

この調査成果が今後、埋蔵文化財の保護のために広く活用され、また地域の歴史を理解する一助となることを期待します。

最後に、日頃から埋蔵文化財の保護に対してご理解をいただいている青森県県土整備部道路課に厚くお礼申し上げるとともに、発掘調査の実施と調査報告書の作成にあたり、ご指導、ご協力をいただきました横浜町教育委員会をはじめとする関係各位に対し、心より感謝いたします。

令和5年3月

青森県埋蔵文化財調査センター
所長 和田 和男

例言・凡例

- 1 本報告書は、青森県県土整備部道路課による国道279号横浜北バイパス道路改築事業に伴い、青森県埋蔵文化財調査センターが令和3年度に発掘調査を実施した横浜町林ノ脇遺跡の発掘調査報告書である。発掘調査面積は、2,000㎡である。
- 2 林ノ脇遺跡の所在地は青森県上北郡横浜町太郎須田地内、青森県遺跡番号は406018である。
- 3 発掘調査及び整理作業・報告書作成の経費は、調査を委託した青森県県土整備部道路課が負担した。
- 4 本報告書に関する発掘調査から整理・報告書作成までの間は、以下のとおりである。
発掘調査期間 令和3年5月11日～同年10月8日
整理・報告書作成期間 令和4年4月1日～令和5年3月31日
- 5 本報告書は、青森県埋蔵文化財調査センターが編集し、青森県教育委員会が刊行した。執筆と編集は、青森県埋蔵文化財調査センター平山明寿文化財保護主幹、小田川哲彦文化財保護主幹が担当した。依頼原稿及び委託原稿については、文頭に執筆者名あるいは機関を記した。発掘調査成果の一部は、ホームページや発掘調査報告等において公表しているが、これらと本書の内容が異なる場合は、本書が優先する。
- 6 発掘調査から整理・報告書作成にあたり、以下の業務については委託により実施した。

遺跡・遺構の空中写真撮影	株式会社 シン技術コンサル
モザイク写真作成	株式会社 シン技術コンサル
放射性炭素年代測定	株式会社 パレオ・ラボ
遺物の写真撮影	有限会社 無限
- 7 石器の石質鑑定は調査員梅田浩司氏(国立大学法人弘前大学大学院工学研究科)に依頼した。
- 8 本書に掲載した地形図(遺跡位置図等)は、国土地理院発行の地図を合成・加工して使用した。
- 9 測量原点の座標値は、世界測地系(JGD2011)に基づく平面直角座標第X系による。挿入図中の方位は、すべて座標北を示している。
- 10 遺構には、その種類を示すアルファベットの略号に検出順位を示す算用数字を組み合わせた略称を遺構ごとに付した。遺構に使用した略号・略称は以下のとおりである。
SD：溝跡 SI：堅穴建物跡 SV：溝状土坑
- 11 遺物については、取り上げ順に種別ごとの略号と番号を付した。略号は以下のとおりである。
P：土器 S：石器 C：炭化材
- 12 遺跡の基本土層にはローマ数字、遺構内堆積土層には算用数字を使用した。各土層の色調表記等には、『新版標準土色帖2006年版』(小山正忠・竹原秀雄)を基に記録した。土層断面図には水準点を基にした海拔標高を付した。

- 13 各挿図中の遺構実測図の縮尺は、原則として、竪穴建物跡・溝状土坑は1/60とし、スケールを示した。路線図・調査区域図・遺構配置図等は適宜縮尺を選択し、各挿図にスケールを示した。使用した網掛けは、下記のとおりである。



- 14 各遺構の規模に関する計測値は、原則として現存値を記載した。構築時の形状・規模を把握出来ない事例(他遺構・攪乱による破壊、調査区域外への延伸等)については、()を付して、現存値を示した。
- 15 遺物実測図の個別番号は、図版ごとに1から遺物番号を付した。
- 16 遺物実測図の縮尺は、土器類1/3、剥片石器類1/2、礫石器類1/3、金属製品類1/3を原則とし、各挿図にスケールを示した。また遺物実測図に使用した網掛けは、下記のとおりである。



- 17 各遺物写真には遺物実測図と共通の図番号を付しており、縮尺は不同である。
- 18 発掘調査及び整理・報告書作成における出土品、実測図、写真等は、現在、青森県埋蔵文化財調査センターが保管している。
- 19 発掘調査及び整理・報告書作成に際して、下記の機関からご協力、ご指導を得た。
横浜町教育委員会、道の駅よこはま

目次

口 絵

序

例 言・凡 例

目 次

挿図目次・写真図版目次・表目次

第1章 調査概要	1
第1節 調査に至る経緯.....	1
第2節 調査の方法.....	1
第3節 調査及び整理体制.....	3
第4節 発掘・整理作業経過.....	3
第2章 遺跡の環境	5
第1節 遺跡の位置と周辺の遺跡.....	5
第2節 基本土層.....	8
第3章 検出遺構と出土遺物	11
第1節 検出遺構.....	11
第2節 遺構外出土遺物.....	26
第4章 自然科学分析	30
第1節 放射性炭素年代測定.....	30
第5章 総括	33
第1節 縄文時代および弥生時代の林ノ脇遺跡.....	33
第2節 溝状土坑.....	33
第3節 平安時代の出土遺物.....	37
第4節 平安時代の集落変遷.....	38
第5節 屈曲を有する溝跡.....	41
第6節 中世および近世の林ノ脇遺跡.....	43
引用・参考文献.....	45
写真図版	
報告書抄録	

挿図目次

図 1	遺跡位置図	7
図 2	路線図・調査区域図	9
図 3	遺構配置図	10
図 4	溝状土坑	13
図 5	第22号竪穴建物跡	15
図 6	第22号竪穴建物跡出土遺物(1)	17
図 7	第22号竪穴建物跡出土遺物(2)	18
図 8	第18号溝跡(1)	19
図 9	第18号溝跡(2)	20
図10	第18号溝跡(3)	21
図11	第18号溝跡出土遺物(1)	22
図12	第18号溝跡出土遺物(2)	23
図13	第18号溝跡出土遺物(3)	24
図14	第18号溝跡出土遺物(4)	25
図15	遺構外出土遺物(1)	27
図16	遺構外出土遺物(2)	29
図17	林ノ脇遺跡溝状土坑配置図	35
図18	竪穴建物跡の主軸方向およびカマド軸方向	39
図19	主軸方向による竪穴建物跡および溝跡の分類	40
図20	米軍写真に見る林ノ脇遺跡	42
図21	屈曲を有する溝跡・塚跡を検出した遺跡	43
図22	屈曲を有する溝跡・塚跡集成図	44

写真図版目次

写真 1	遺跡空中写真	49
写真 2	作業状況(1)	50
写真 3	作業状況(2)・溝状土坑(1)	51
写真 4	溝状土坑(2)	52
写真 5	溝状土坑(3)	53
写真 6	第22号竪穴建物跡	54
写真 7	第18号溝跡(1)	55
写真 8	第18号溝跡(2)	56
写真 9	第18号溝跡(3)	57
写真10	遺構内出土遺物(1)	58
写真11	遺構内出土遺物(2)・遺構外出土遺物(1)	59
写真12	遺構外出土遺物(2)	60

表目次

表 1	林ノ脇遺跡と周辺の遺跡一覧	6
表 2	横浜町内・近隣市町村検出溝状土坑数と主軸方向	36
表 3	竪穴建物跡一覧	39
表 4	遺構間接合遺物一覧	40
表 5	屈曲を有する溝跡・壕跡一覧	43
表 6	遺構計測表	47
表 7	土器観察表	47
表 8	土製品観察表	48
表 9	土製支脚観察表	48
表10	鉄生産関連遺物観察表	48
表11	石器観察表	48

第1章 調査概要

第1節 調査に至る経緯

国道279号横浜北バイパス道路改築事業予定地内に所在する埋蔵文化財の取り扱いについては、平成26年度から青森県県土整備部道路課及び上北地域県民局地域整備部（以下「事業者」と）と青森県教育庁文化財保護課（以下「文化財保護課」）が継続的に協議・踏査を重ねてきた。用地買収や立木伐採等上物撤去の進捗状況に合わせて、平成30年に文化財保護課が試掘調査を行ったところ、遺構や遺物が確認されたことから、工事中センター杭No.64～68間については工事施工前の本発掘調査が必要であるとした（青森県教育委員会2019）。

この結果を受け、再度事業者と文化財保護課との間で協議を行ったが、遺跡の現状保存が困難であることから、工事優先箇所や他調査事業との調整を経て、令和元年度に林ノ脇遺跡の本発掘調査を実施する計画とし、青森県埋蔵文化財調査センターが調査を担当することとなった。

調査の結果、縄文時代早期前葉の土坑と遺物集中地点、縄文時代中期後葉～後期前葉の溝状土坑、弥生時代後期の堅穴建物跡の他、平安時代の多数の堅穴建物跡を検出した（青森県教育委員会2021以下、「2019年度調査」）。これを受け、その北側の工事中センター杭No.68～71間の扱いを再度協議し、令和3年度に本発掘調査を実施することとなった。令和3年2月26日付の上県局整備第2401号で上北地域県民局長から文化財保護法第94条第1項の土木工事等のための発掘に関する通知がなされ、青森県教育委員会教育長が令和3年3月15日付青教文第1366号で工事着事前の本発掘調査（記録保存調査）を通知している。

なお、本調査区に隣接した西側は、道の駅よこはまエリア地方創生拠点事業による発掘調査を当センターが行い（以下「第634集調査」）、縄文時代中期後葉～後期前葉の溝状土坑を検出した（青森県教育委員会2023）。

第2節 調査の方法

1 発掘作業の方法

[測量基準点・水準杭の設置・グリッド設定] 調査区設定・遺構測量に用いた基準点は、調査区の内外に打設されていた工事中基準（4級基準点）を利用した。基準点からの測量に支障が生じた場合、調査区内の任意点に座標を移動し使用した。グリッドは世界測地系による国土座標値を基準として4×4mに設定した。グリッド原点と呼称は2019年度調査と同様とした。即ち、平面直角座標第X系のX=120,200、Y=35,600を原点（IA-1）とし、各グリッドは南から北方向にアルファベットを、西から東方向に算用数字を付して、その南西隅の組み合わせで呼称した。なお、アルファベットは文字I巡による重複を防ぐためローマ数字を併用したほか、Zは使用せず、Yの次はAとした。

[基本土層] 基本土層は、調査区の堆積を把握できるように、主に調査区壁面で確認し、上位から層順に第1層、第2層とローマ数字を付した。土層観察時に色調や混入物により第IV a・第IV b層などと細別した箇所もあるが、遺物取り上げは大別層ごとに行った。

[表土等の調査] 試掘調査や前回の調査成果を踏まえ、表土の除去には重機を用いて掘削の省力化を

図った。遺構外出土と判断した遺物は、調査グリッドと出土層等を記録し取り上げた。

[遺構の調査] 遺構の検出は主に基本土層の第Ⅳ層上面で行った。検出遺構は、原則として確認順に番号を付し、略称との組み合わせで呼称した。堆積土層観察用のセクションベルトは、主に溝状土坑は2分割、竪穴建物跡は4分割で設定し、調査を行った。遺構内堆積土には、確認面から順に層序番号を算用数字で付し、ローマ数字の基本土層と区別した。遺構内遺物の出土位置の記録は、ソキア製トータルステーションによる測量点を元に、株式会社CUBIC製「遺構実測支援システム」によるデジタル測量によった。溝状土坑、竪穴建物跡等の平面図および堆積土の断面図は、前述のデジタル測量によって、原則として縮尺1/20の実測図を作成した。遺構内の出土遺物については、層位ごとに取り上げた。また、出土状況によっては、遺物微細図の作成も行った。

[写真撮影] 原則として35mmモノクローム、35mmカラーリバーサル、および約2,620万画素のフルサイズデジタル一眼レフカメラを使用し、発掘作業状況、土層の堆積状況、遺物の出土状況、遺構の検出・精査状況、完掘後の全景等を記録した。発掘作業の過程の記録には、約1,605万画素のコンパクトデジタルカメラを併用した。また、ラジコンヘリによる遺跡および調査区全体の空中写真撮影を業者委託して実施した。

2 整理・報告書作成作業の方法

[図面類の整理] 遺構は、株式会社CUBIC製「遺構実測支援システム」で作成した平面図・堆積土層断面図を用いて調整を行った。

[写真類の整理] 35mmモノクロームフィルム及び35mmカラーリバーサルフィルムは撮影順にアルバムに整理収納し、デジタル写真は撮影内容がわかるファイル名に変更後、遺構ごとに整理し、HDDおよび長期保存用ブルーレイディスクに保存した。

[遺物の洗浄・注記と接合・復元] 遺物の注記は、調査年度、遺跡名、遺構名またはグリッド、出土層位、取り上げ番号を略記した。直接注記できないものは、収納した袋に記載した。

[報告書掲載遺物の選別と観察・図化] 縄文土器・土師器・須恵器・擦文(系)土器・陶磁器については、時期・型式毎に分類した上で、遺構の構築時期を示す資料、時期・型式の特徴を良く表す復元資料を主として選別した。その他の遺物については、器種毎に分類した上で、遺構に伴って出土した資料、遺存状態が良く同類の中で代表的な資料を主として選別した。

一定の形状を復元した資料や遺構の構築時期を示す資料については、原則として実測図を作成して形状・特徴等を記録し、観察表を作成した。

[遺物の写真撮影] 業者に委託して行い、質感や製作技法等を表現するよう撮影した。

[自然科学分析] 炭化物の年代を明らかにするため、放射性炭素年代測定を業者に委託した。

[遺構・遺物のトレース・遺物写真切り抜き・図版作成] 遺構・遺物のトレースは、株式会社CUBIC製「遺構実測支援システム」・「遺物実測支援システム」およびアドビ株式会社製Illustratorを用いて行った。遺構写真の調整と遺物写真の切り抜きは、アドビ株式会社製Photoshopを用いて行った。図版の作成は、アドビ株式会社製Illustratorを用いて行った。

第3節 調査及び整全体制

1 発掘調査体制

発掘調査体制は以下のとおりである。

調査担当者	青森県埋蔵文化財調査センター	
	所長	葛西 浩一（令和4年3月31日退職）
	総務GM	油布 恵美
	調査第二GM	齋藤 岳
	文化財保護主幹	浅田 智晴（発掘調査担当者・現総括主幹）
	文化財保護主幹	平山 明寿（発掘調査担当者）
	文化財保護主幹	小田川哲彦（発掘調査担当者）

専門的事項に関する指導・助言

調査員	宇部 則保	八戸市埋蔵文化財センター是川縄文館発掘専門員 （考古学）
-----	-------	---------------------------------

2 整理・報告書作成体制

整理・報告書作成体制は以下のとおりである。

整理主体	青森県埋蔵文化財調査センター	
	所長	和田 和男
	総務GM	油布 恵美
	調査第二GM	齋藤 岳
	文化財保護主幹	平山 明寿（報告書作成担当者）
	文化財保護主幹	小田川哲彦（報告書作成担当者）

専門的事項に関する指導・助言

調査員	宇部 則保	八戸市埋蔵文化財センター是川縄文館発掘専門員 （考古学）
〃	梅田 浩司	国立大学法人弘前大学大学院理工学研究科教授 （地質学）

第4節 発掘・整理作業経過

1 発掘作業の経過

林ノ脇遺跡の発掘調査は、令和3年5月11日に開始し、同年10月8日に終了した。発掘作業の経過は以下のとおりである。

- 5月11日 発掘調査器材等の搬入を行い、発掘調査を開始した。発掘調査作業員に作業の説明を行い、調査区周囲をロープで囲う等の環境整備を行った。
- 5月中～下旬 調査区の境界から粗掘り作業を行った。調査区西半は1～2m近く盛土されていることが判明した。調査区東側で溝状の攪乱を数条確認した。塩ビ管や土管が埋設されていたことから、耕作に伴う現代の配水管と推定した。調査区南側の東西端で溝跡（SD18）

を検出した。

- 6月上旬～中旬 調査区南端にはクマザサ・ウルシが繁茂しており、その除去に時間を要した。溝跡は、幅約2.5mで調査区を東西方向に横断することが判明した。2019年度調査の集落を区画する溝跡と推定した。
- 6月下旬 調査区西半を広く覆う盛土と擁壁を重機で除去した。
- 7月上旬 堅穴建物跡(SI22)を検出した。調査区西側で溝状土坑を2基並行して検出した。第634集調査で検出したものと列状に並ぶ。
- 7月下旬 溝跡は、北側に張り出す屈曲部を有することが判明した。30日に横浜町文化財保護審議会委員が現場を視察した。
- 8月 遺構検出作業・遺構精査を進め、調査区北半の精査は終了した。
- 9月上旬 7日に遺跡・遺構の空中写真撮影を行った。
- 9月中旬 15日に発掘調査に係る鑑定等の指導を調査員から受けた。
- 9月下旬 堅穴建物跡の床面中央から地床炉を検出した。
- 10月上旬 6日に遺跡・遺構の空中写真撮影を行った。7日に横浜町立横浜小学校の生徒を対象にした現地見学会を開催した。
- 10月8日 発掘調査機材等の片付け・清掃を行い、器材・出土遺物等を泉埋蔵文化財調査センターへと搬送し、すべての作業を終了した。

2 整理・報告書作成作業の経過

整理・報告書作成作業は令和4年4月1日から令和5年3月31日までの期間で行った。発掘調査では段ボール箱換算で5箱の土器類、石器類、金属製品、陶磁器が出土し、これらに応じた整理作業の工程を計画した。報告書は遺構や遺物の数に応じた分量を各々の記載にあてることにした。

整理・報告書作成作業の経過は以下のとおりである。

- 4月 遺物の分類と選別を行った。
- 5月 土器・石器の数量計測を行い、遺構内出土土器から接合作業を行った。
- 6～7月 接合・復元が進んだ土器の選別を行い、採拓と実測を行った。礫石器の実測を行った。
- 8～9月 土器・礫石器のトレースを行った。
- 10月 土器・石器以外の遺物の選別を行った。遺構図の調整を開始した。
- 11月 剥片石器の実測図作成とトレースを行った。図化が完了したものから、各種図版作成作業と共に報告書掲載遺物観察表の作成を行った。また、遺物の写真撮影を行うとともに、報告書の原稿執筆を開始した。
- 12月～2月 原稿・版下が揃ったので報告書の割付・編集作業を行い、印刷業者を入札・選定し、契約事務を完了した。印刷業者へ原稿及び版下を入稿した。校正、及び出土遺物・記録類の整理を行った。
- 3月15日 3回の校正を経て、報告書を刊行した。
- 3月下旬 記録類、出土遺物等を整理して収納した。 (平山)

第2章 遺跡の環境

第1節 遺跡の位置と周辺の遺跡

林ノ脇遺跡は、JR大湊線陸奥横浜駅から南東に800m程の、陸奥湾に注ぐ三保川右岸の標高約25mの段丘上に位置する。遺跡の所在する横浜町は下北半島頸部のほぼ中央にあり、北はむつ市、南は野辺地町、東は東通村と六ヶ所村に接し、西は陸奥湾に面している。菜の花と海産物のなまこが著名で、町を南北に貫く国道279号線の沿線は、国土交通省の日本風景街道「黄花紅の東むつ湾ルート」にも選定されている。町内には、国指定の重要無形民俗文化財「記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財（選択）である「下北の能舞」や県無形民俗文化財「横浜町の獅子舞」・「横浜町の神楽」、県天然記念物「横浜町のゲンジボタルおよびその生息地」、町史跡牛ノ沢遺跡^(※1)等が所在する。町西側の海岸は、町中央を境に北半は海食崖・南半は砂浜と様相が異なる。集落は海岸沿いに点在し、集落を繋ぐように国道279号線が縦走する。

横浜という地名の記述は、南部信直書状にある「野邊地・よこ浜にて、えぞふねあまたこしらへ候て」^(※2)が初見と思われる。「横浜村」^(※3)としては、寛文4（1664）年の領知目録や、『邦内郷村志』・『仮名付帳』等に認められる^(※4)。また、『信直記』・『九戸軍記』の九戸一揆側の人物中に「横浜左衛門」「横浜左兵衛尉」なる人物が記載されている^(※5)。横浜館は陸奥横浜駅付近にあり、七戸氏から分家した横浜氏が治めていたとされる^(※6)。地誌・日記等では、松浦武四郎・漆戸茂樹・伊能忠敬等が横浜村を訪れた際の様子を記しており、往事の様子を類推する事ができる^(※7)。ちなみに、近世街道の田名部通は国道279号線がほぼ踏襲している^(※8)。横浜村は近隣の村々と共に有戸（鎌渡）野の牧の舎飼（藩有馬の冬期間飼育）を課せられていた^(※9)。近世以降の歴史概略は第634集の報告書に記載している（青森県教育委員会2023）。

町内には32の遺跡が所在する^(※10)。図1に本遺跡を含む29遺跡を示した。詳細は2019年度調査（青森県教育委員会2021a）や、周辺の発掘調査（青森県教育委員会2021b・2022a）報告書に譲るが、陸奥湾沿いの段丘上に位置し、弥生時代や中世（城館）、近世（製塩遺跡^(※11)）の遺跡が目立つ。

林ノ脇遺跡は、昭和46年に発見された遺跡である（青森県教育委員会1973）。過去に文化財保護課による試掘調査（青森県教育委員会1994・2019・2022b）や、当センターによる本発掘調査（青森県教育委員会2021a）を実施しており、縄文時代早期前葉の土坑と遺物集中地点、縄文時代中期後葉～後期前葉の溝状土坑、弥生時代後期の竪穴建物跡の他、平安時代の竪穴建物跡を多数検出している。

今回の調査区は、2019年度調査区の北で、幅45m・西辺60m・東辺30m程の台形を横にしたような形状をしている。標高は27m前後で、調査区内はほぼ平坦であるが、東から西に向かって緩やかな傾斜がある。調査開始前の土地利用状況は畑地であった。

(※1) 町ホームページでは牛ノ沢館跡。

(※2) №233「南部信直書状」（文禄2（1593）年5月27日）『青森県史 資料編 中世1』（青森県史編さん中世部会2004）

(※3) 吹越・百目木・檜木・大豆田・鶏沢・有畑・浜田は、近世までは横浜村（本村）の支村であった。

- (No.173「仮名付帳 下」(享和3(1803)年)『青森県史 資料編 近世4』(青森県史編さん近世部会2003)・「邦内郷村志」(寛政9(1797)年)『南部叢書』第5冊(南部叢書刊行会1929))等
- (※4) No.78「目録」(徳川家綱領目録 南部重直宛・寛文4(1664)年4月5日)『青森県史 資料編 近世4』(青森県史編さん近世部会2003)。「仮名付帳」・「邦内郷村志」は※3と同じ。
- (※5) No.689「信直記」・No.690「九戸軍記」『青森県史 資料編 中世1』(青森県史編さん中世部会2004)
- (※6)「横浜館」『青森県の中世城館』(青森県教育委員会1983)
- (※7) 松浦武四郎『東奥沿海日誌 津 三』(嘉永2(1849)年)『東奥沿海日誌』(吉田武三編1969)・漆戸茂樹『北奥路程記』(安政3(1856)年)『読み下し文北奥路程記』(岩手県文化財愛護協会2002)
- (※8) 野辺地(有戸)～横浜(本村)までは海岸を通行していた(青森県教育委員会1986)。
- (※9) No.340「九ヶ御野発端并八戸御境塚築候ヶ所附控帳」『青森県史 資料編 近世4』(青森県史編さん近世部会2003)
- (※10) 遺跡地図には登録されていないが、吹越で細石刃・剥片等が、浜懸で縄文時代後期中葉の壺が採取されている(角鹿・渡辺1980)。
- (※11) 『田名部道』(青森県教育委員会1986)には「塩竈に擬せられる遺構⑥が存在する。」とあるが、現在、見つけれない。

表1 林ノ脇遺跡と周辺の遺跡一覧

遺跡番号	遺跡名	時 代										種別	備考		
		縄文					弥生	古墳	奈良	平安	中世			近世	
		草	早	前	中	後									
406001	とまり川(1)遺跡					○								散布地	
406002	とまり川(2)遺跡						○							散布地	
406003	雲雀平(1)遺跡				○									散布地	
406004	明神平遺跡					○	○							散布地	
406005	牛ノ沢遺跡										○			城館跡	町史跡
406007	鳥帽子平遺跡					○	○							散布地	
406008	中吹越遺跡										○			散布地	
406009	吹越(1)遺跡									○		○		貝塚・割塩遺跡	
406010	松栄遺跡													散布地	縄文時代
406011	向沢遺跡													散布地	縄文時代
406012	百目木(1)遺跡						○							散布地	
406013	百目木(2)遺跡										○	○		散布地・生産遺跡	
406014	藁内川(1)遺跡						○							散布地	
406015	藁内川(2)遺跡					○	○							散布地	
406016	藁内川(3)遺跡										○			散布地	
406017	横浜遺跡										○			散布地	
406018	林ノ脇遺跡	●		●	●	●	●			○	●	●		散布地・集落跡	
406019	松守遺跡						○							散布地	
406020	太郎須田遺跡					○								集落跡	
406022	横浜館										○			城館跡	
406023	雲雀平(2)遺跡										○			生産遺跡	
406024	雲雀平(3)遺跡									○	○			生産遺跡	
406025	松守(2)遺跡									○				散布地	縄文時代
406027	モダシ平遺跡					●	●	○		○				散布地	
406028	雲雀平(4)遺跡									○	○			散布地・生産遺跡	
406029	百目木(3)遺跡							●						集落跡・狩猟場	縄文時代
406030	吹越(2)遺跡													集落跡・狩猟場	縄文時代
406031	林ノ後遺跡										○			集落跡	縄文時代
406032	上イタヤノ木遺跡										○			散布地	

●：青森県教育委員会が調査した遺跡で、調査結果から加筆した時代。

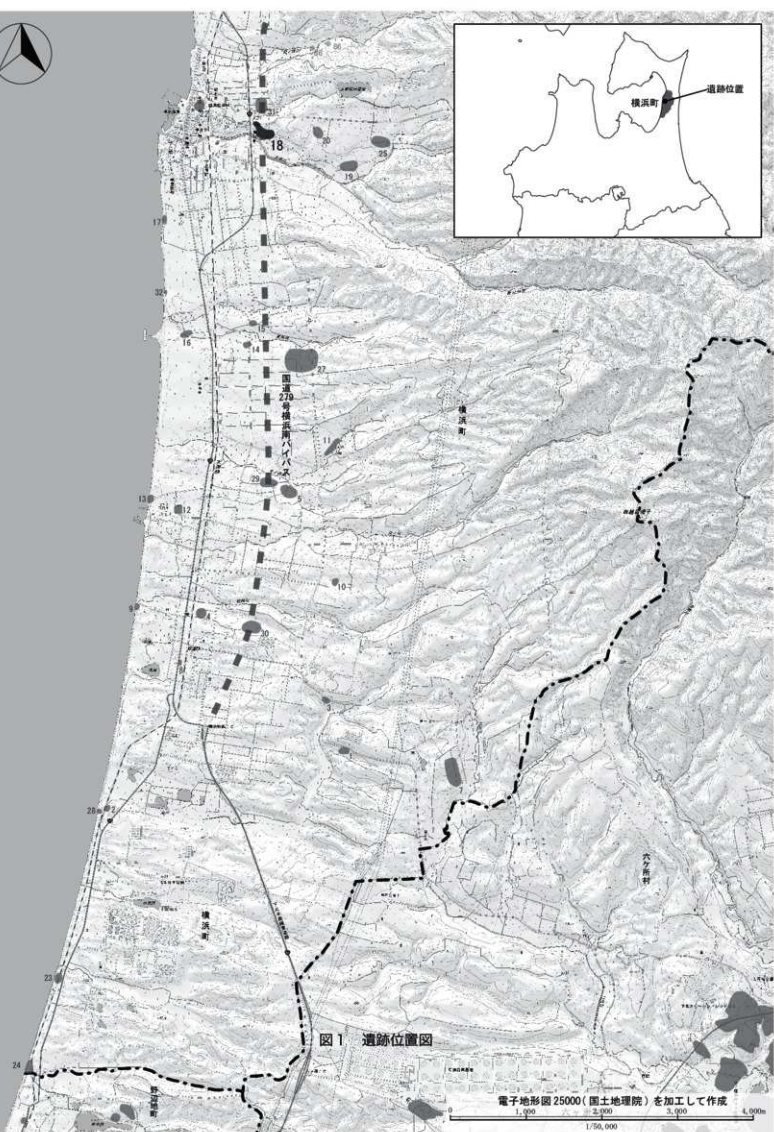
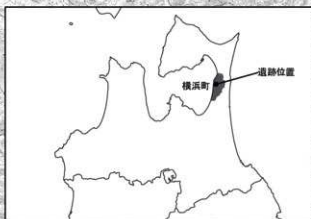


図1 遺跡位置図

電子地形図 25000 (国土地理院) を加工して作成

1,000 2,000 3,000 4,000m
1/50,000

第2節 基本土層

遺跡が所在する下北半島頸部中央は、山地（吹越山地）が南北に連なり、その周辺に丘陵地が広がる。丘陵地の西側には、陸奥湾に沿って段丘（中位段丘）が分布する。段丘は標高等から上位面と下位面とに細分される。陸奥湾岸は大半が砂浜海岸である。林ノ脇遺跡は、三保川の北側の段丘下位面に立地する。三保川とは比高15m程の急崖となっている。地形・地質の図等は、2019年度調査（青森県教育委員会2021a）や周辺遺跡の調査事例（青森県教育委員会2021b・2022a）を参照されたい。

調査区の標高は27m前後で、ほぼ平坦であるが、東から西に向かって緩やかな傾斜がある。調査開始前の土地利用状況は畑で、耕作に伴うと推測される削平・盛土が広範囲に認められる。基本土層は、第634集調査区西端・南端の2箇所で作図した（青森県教育委員会2023）。層番号は、2019年度調査を基本的に引き継ぐものの、一部追加ないし削除した。

第Ⅰ層：黒～黒褐色土	耕作土や整地層といった近現代の人為的土地改変層。a～eの5層に細分される。
第Ⅱ層：黒褐色土	黒ボク土層。調査区東半では欠層する。2019年度調査の第Ⅲ層に該当する。
第Ⅲ層：暗褐色土	漸移層。2019年度調査の第Ⅳ層に該当する。
第Ⅳ層：黄褐色～明黄褐色粘土	ソフトローム層。しまり具合によってa～bの2層に細分される。しまりのある上層が2019年度調査の第Ⅴ-1層、しまりの弱い下層が第Ⅴ-2層に該当する。
第Ⅴ層：にぶい黄褐色粘土	ハードローム層。マンガン粒を多く含み、硬くしまる。2019年度調査の第Ⅴ-3層に相当する。 (平山)

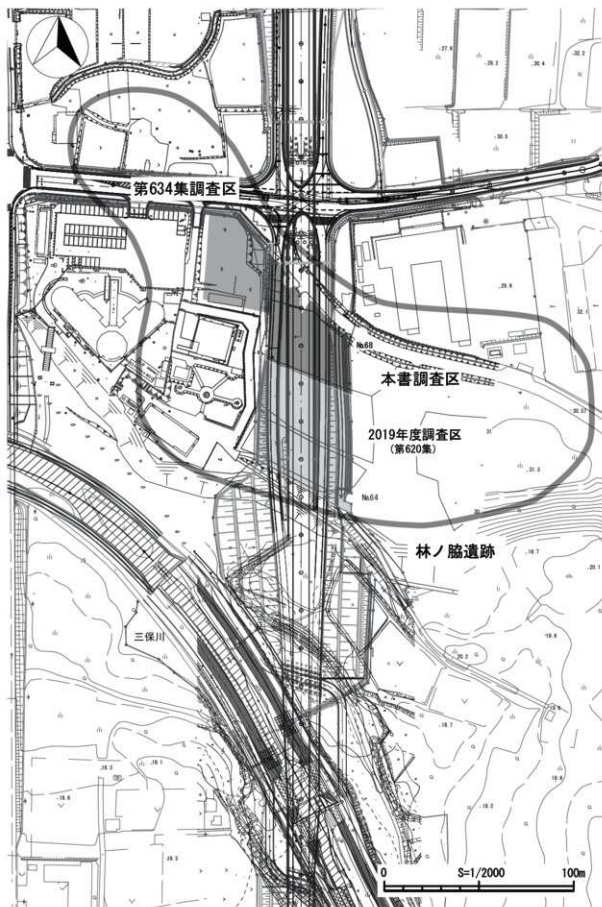
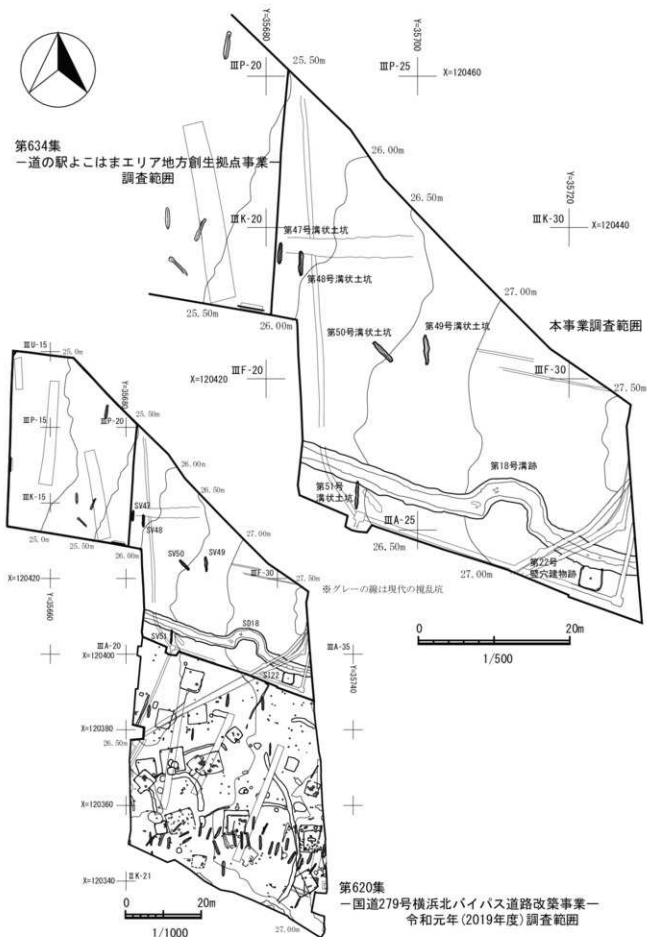


図2 路線図・調査区域図



第634集
一道の駅よこはまエリア地方創生拠点事業
調査範囲



第620集
一国道279号横浜北バイパス道路改築事業—
令和元年(2019年度)調査範囲

図3 遺構配置図

第3章 検出遺構と出土遺物

2019年度調査区北側の標高25～27m地点に、竪穴建物跡1棟、溝跡1条、溝状土坑5基を検出した。竪穴建物跡と溝跡は、2019年度調査区境界に近接して検出している。溝状土坑は、重複もなく散漫に分布するが、数基が対に並んでいる。

各遺構の帰属時期は形状及び出土遺物から、溝状土坑は縄文時代に、竪穴建物跡と溝跡は平安時代に比定される。前述しているが、各遺構番号は2019年度調査の番号から継続して付している。

第1節 検出遺構

1 縄文時代の遺構

溝状土坑

第47号溝状土坑 (SV47、図4、写真3)

〔位置・確認〕 III1・IIIJ-21 グリッドに位置する。標高約25.8mの第IV層面で検出した。

〔重複〕 一部後世の擾乱と重複。

〔形状・規模〕 開口部全体が不整な長楕円形である。本遺構南端上部が擾乱で削られているほか、開口部全体が耕作などの影響を受けているものと思われる。規模は開口部長軸(長さ)2.78m、短軸(幅)0.57m、底面長軸2.61m、底面短軸0.13m、深さは1.11mで、底面には多少起伏がある。長軸断面形は両端部がほぼ直立する箱状で、短軸断面形は中位で開くY字状である。長軸方向はN-5.8°-Eである。

〔堆積土〕 周壁の崩落を伴う自然堆積で、4層に分けられる。

〔小結〕 これまでの類例と2019年度調査例から縄文時代中期後葉以降に帰属するものと捉えておく。

第48号溝状土坑 (SV48、図4、写真4)

〔位置・確認〕 調査区西側境界III1・IIIJ-22 グリッドに位置する。標高約25.9mの第IV層面で検出した。

第47号溝状土坑に近接する。

〔重複〕 なし

〔形状・規模〕 長楕円形で、開口部西側縁辺が不整である。規模は開口部長軸(長さ)3.23m、短軸(幅)0.54m、底面長軸3.13m、底面短軸0.13m、深さは1.17mで、底面はほぼ平坦である。長軸断面形は両端部が直立する箱状で、短軸断面形は開きの弱いV字状である。長軸方向はN-0.3°-Wである。

〔堆積土〕 周壁の崩落を伴う自然堆積で、6層に分けられる。

〔小結〕 これまでの類例と2019年度調査例から縄文時代中期後葉以降に帰属するものと捉えておく。

第49号溝状土坑 (SV49、図4、写真4)

〔位置・確認〕 III F・III G-26 グリッドに位置する。標高約26.7mの第IV層面で検出した。

〔重複〕 なし

〔形状・規模〕 全体的に不整な長楕円形である。開口部全体が耕作などの影響を受けている可能性が

ある。規模は開口部長軸(長さ)3.93m、短軸(幅)0.68m、底面長軸3.63m、底面短軸0.15m、深さは1.06mである。底面中央から北側は緩い傾斜で上がり、(2019年度調査)第Ⅶ層に包含される礫により起伏もある。南端から中央部までの底面はほぼ平坦である。長軸断面形は南端部がほぼ直立する箱状で、北側は開くように立ち上がる。短軸断面形は西側が直線的に開き、東側は中位で大きく開くY字状である。長軸方向はN-2.4°-Wである。

[堆積土] 壁の崩落を伴う自然堆積で、5層に分けられる。

[小結] これまでの類例と2019年度調査例から縄文時代中期後葉以降に帰属するものと捉えておく。

第50号溝状土坑(SV50、図4、写真5)

[位置・確認] ⅢF・ⅢG-24・25グリッドに位置する。標高約26.4~26.6mの第Ⅳ層面で検出した。

[重複] 一部後世の攪乱と重複する。

[平面形・規模] 平面形状は長楕円形で、本遺構北端上部が攪乱で削られている。規模は開口部長軸(長さ)3.52m、短軸(幅)0.64m、底面長軸3.32m、底面短軸0.19m、深さは1.28mで、底面はほぼ平坦である。長軸断面形は北端がほぼ直立し、南端は緩くオーバーハングする。短軸断面形は中位で開くY字状である。長軸方向はN-43.3°-Wである。

[堆積土] 壁の崩落を伴う自然堆積で、7層に分けられる。

[小結] これまでの類例と2019年度調査例から縄文時代中期後葉以降に帰属するものと捉えておく。

第51号溝状土坑(SV51、図4、写真5)

[位置・確認] 調査区南西側境界ⅢA・ⅢB-23・24グリッドに位置する。標高約26.5m付近の第Ⅳ層面で検出した。

[重複] 本遺構の北端が平安時代の第18号溝跡と重複している。

[平面形・規模] 開口部全体が不整な長楕円形である。第18号溝跡との重複で削られているほか、周辺の状況から開口部全体が耕作などの影響を受けているものと思われる。規模は開口部長軸(長さ)3.65m、短軸(幅)0.39m、底面長軸3.39m、底面短軸0.19m、深さは1.08mで、底面には起伏がある。長軸断面形は両端が開く逆台形状で、短軸断面形は緩いY字状である。長軸方向はN-2.5°-Eである。

[堆積土] 壁の崩落を伴う自然堆積で、4層に分けられる。

[小結] これまでの類例と2019年度調査例から縄文時代中期後葉以降に帰属するものと捉えておく。

(小田川)

2 平安時代の遺構

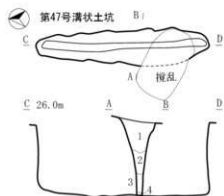
竪穴建物跡

第22号竪穴建物跡(SI22、図5~7、写真6・10)

[位置・確認] 調査区東側ⅡX-31・32グリッドに位置する。標高約27.3mの第Ⅳ層面で確認した。

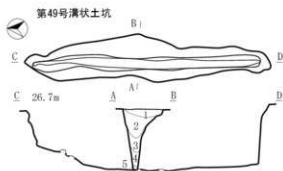
[重複] 第18号溝跡と重複する。溝跡が新しく、本遺構の北側壁面が欠失している。

[形状・規模] 平面形は隅丸方形である。規模は開口部長軸2.96m、短軸2.80m、検出面からの深さは最大17cmである。床面積は残存する部分で7.16㎡、推定で7.4㎡程であったと思われる。床面は第Ⅴ層のローム塊が多量に混合する掘方埋土で、起伏がある。断面形状は概ね箱形である。



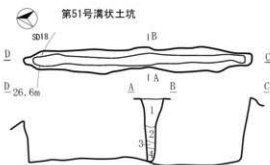
第47号溝状土坑 (SV47)

- 第1層 10YR3/1 黒褐色土 10YR5/8黄褐色ローム粒($\phi \sim 10\text{mm}$)3%混合、掘り上げ土主体。
 第2層 10YR5/6 黄褐色ローム質土 10YR2/1黒色土粒($\phi \sim 1\text{mm}$)2%混合、壁崩落土主体の堆積土。
 第3層 10YR4/4 褐色土 10YR2/1黒色土粒($\phi \sim 1\text{mm}$)2%混合、壁崩落土と混合。
 第4層 10YR2/1 黒色土 10YR5/8黄褐色ローム塊($\phi \sim 40\text{mm}$)20%混合、初期堆積土に崩落土混入。



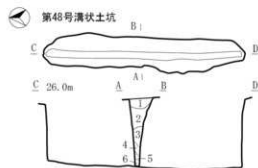
第49号溝状土坑 (SV49)

- 第1層 10YR2/1 黒色土 10YR5/8黄褐色ローム粒($\phi \sim 5\text{mm}$)2%混合、凹壁への自然流入土。
 第2層 10YR3/1 黒褐色土 10YR5/8黄褐色ローム塊($\phi \sim 100\text{mm}$)20%混合、壁崩落土、底状に混合。
 第3層 10YR4/6 褐色土 10YR2/1黒色土粒($\phi \sim 1\text{mm}$)2%混合、10YR5/8黄褐色ローム塊($\phi \sim 50\text{mm}$)壁崩落土混合、壁崩落土主体。
 第4層 10YR5/6 黄褐色ローム質土 10YR2/1黒色土粒($\phi \sim 1\text{mm}$)2%混合、壁崩落土主体。
 第5層 10YR2/1 黒色土 10YR5/8黄褐色ローム粒($\phi \sim 5\text{mm}$)3%混合、薄層の初期堆積土。



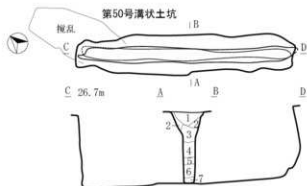
第51号溝状土坑

0 1/60 2m



第48号溝状土坑 (SV48)

- 第1層 10YR4/1 褐色土ローム質土 10YR5/8黄褐色ローム粒($\phi \sim 3\text{mm}$)1%混合、一部に塊($\phi \sim 60\text{mm}$)混入、掘り上げ土。
 第2層 10YR3/4 暗褐色土 10YR2/1黒色土粒($\phi \sim 1\text{mm}$)2%混合、10YR5/8黄褐色ローム塊($\phi \sim 50\text{mm}$)壁崩落土混合、壁崩落土主体の堆積土。
 第3層 10YR5/6 黄褐色ローム質土 10YR2/1黒色土粒($\phi \sim 1\text{mm}$)2%混合、壁崩落土主体の堆積土。
 第4層 10YR3/1 黒褐色土 10YR5/8黄褐色ローム粒($\phi \sim 2\text{mm}$)2%混合、一部にローム塊($\phi \sim 60\text{mm}$)混入。
 第5層 10YR4/6 褐色土 10YR5/8黄褐色ローム塊($\phi \sim 10\text{mm}$)5%混合、自然流入土に壁崩落土混入。
 第6層 10YR2/1 黒色土 10YR5/8黄褐色ローム粒($\phi \sim 5\text{mm}$)3%混合、初期堆積土に崩落土混入。



第50号溝状土坑 (SV50)

- 第1層 10YR2/2 黒褐色土 10YR5/8黄褐色ローム粒($\phi \sim 10\text{mm}$)3%混合、自然流入土。
 第2層 10YR3/2 黒褐色土 10YR5/8黄褐色ローム塊($\phi \sim 50\text{mm}$)5%混合、壁崩落土混入。
 第3層 10YR3/3 暗褐色土 10YR5/8黄褐色ローム塊($\phi \sim 10\text{mm}$)20%混合、崩落土互層状に混合。
 第4層 10YR3/4 暗褐色土 10YR5/8黄褐色ローム粒($\phi \sim 10\text{mm}$)2%混合、壁崩落土、自然流入土混合。
 第5層 10YR5/6 黄褐色ローム質土 10YR5/8黄褐色ローム塊($\phi \sim 100\text{mm}$)20%混合、壁崩落土主体、自然流入土混合。
 第6層 10YR4/6 褐色土 10YR5/8黄褐色ローム粒($\phi \sim 10\text{mm}$)2%混合、壁崩落土、自然流入土混合。
 第7層 10YR2/1 黒色土 10YR5/8黄褐色ローム粒($\phi \sim 5\text{mm}$)3%混合、薄層の初期堆積土。

第51号溝状土坑 (SV51)

- 第1層 10YR3/2 黒褐色土 10YR5/8黄褐色ローム粒($\phi \sim 5\text{mm}$)10%混合、10YR3/3暗褐色土層間に多く混合。
 第2層 10YR4/3 に近い黄褐色土 10YR2/1黒色土粒($\phi \sim 1\text{mm}$)2%混合、10YR5/8黄褐色ローム塊($\phi \sim 50\text{mm}$)壁崩落土混合。
 第3層 10YR5/6 黄褐色ローム質土 10YR5/8黄褐色ローム塊($\phi \sim 100\text{mm}$)20%混合、壁崩落土主体、自然流入土混合。
 第4層 10YR2/2 黒褐色土 10YR5/8黄褐色ローム粒($\phi \sim 20\text{mm}$)10%混合、初期堆積土。

図4 溝状土坑

〔堆積土〕 掘方埋土を含め4層に分けられる。第1・2層の層面に土師器を介し、廃棄埋土の可能性が高い。

〔カマド〕 カマドは無い。2019年度調査の第5～7号竪穴建物跡とはほぼ同規模であり、それにはカマドが構築されているのに対し、本建物跡の壁際床面にはカマドの痕跡も見られない。

〔焼土跡〕 床面中央部に不整形な焼土跡を検出した。被熱厚は約5cmである。

〔柱穴〕 四隅に検出した。規模が20～25cmの方形および楕円形で、床面からの深さは約9～25cmである。

〔出土遺物〕 堆積土第1層と掘方埋土から弥生土器片2点15.9g、第1・2層から土師器片81点835.5g、焼成粘土塊25点286.7g、羽口1点21.1gが出土している。図6-1～13は土師器製の破片である。頸部は短く、口縁部が「く」の字状に外反するもの(1)と、口縁部まで直線的に立ち上がるもの(2～4)とがある。5は端部が受口状に内湾する。底部は外に張り出すものが多い。器面の摩耗が激しく、調整の観察は困難であるが、観察できる限りでは、外面は縦方向のケズリ、内面は横～斜位方向のナデ、外底面はケズリが卓越する。胎土中に3mm程度の小礫を含み、焼成は軟質である。器面は赤褐色で艶い。二次被熱と思われる。図7-1～5は焼成粘土塊である。形状は不整形で、明確な器面形成は認められない。胎土中に1mm程度の小礫を含み、焼成は軟質である。器面は艶く、粉っぽい。摩耗が顕著で、ナデやユビアトといった調整は観察できない。図7-6は羽口である。先端部付近片で、被熱により変色・溶解した箇所が認められる。図7-7は口唇に刻みが入る緩い波状口縁部破片で、R L施工後に横位沈線で区画文された磨り消し文が施された弥生土器(天王山式相当)である。同図8は掘方埋土出土で、R Lが縦位施工される。

〔小結〕 カマドを構築していないことから住居の建物ではない可能性が高い。何らかの作業場的な建物跡の可能性が考えられるが、床面中央部の焼土跡も比較的強い被熱とは言えず、鉄生産関連の作業場とも断定できない。出土土師器から平安時代10世紀後葉のものと思われる。(平山・小田川)

溝跡

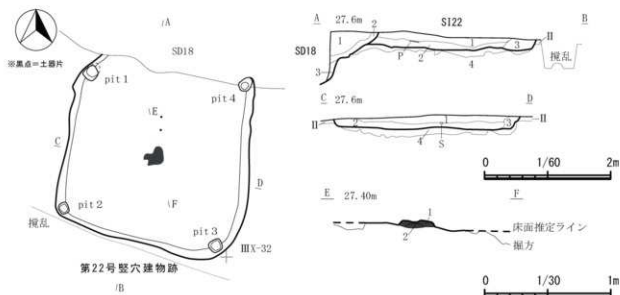
第18号溝跡(SD18、図8～14、写真7～11)

〔位置・確認〕 2019年度調査区境界から北に約4mの間を置き、調査区を東西に横断するように検出した。東側はⅡX・Y-33グリッドから西側はⅢC-22グリッドまで位置する。第Ⅳ層面で確認したが、調査区壁面の土層観察から、第Ⅱ層を掘り込んで構築していることが判明した。

〔重複〕 第22号竪穴建物跡と重複し、本遺構が新しい。

〔形状・規模〕 検出当初は、長さ約47mの直線的な溝跡を想定していたが、東端から約14m付近(ⅢA-30グリッド)と西端から約24m付近(ⅢA-28グリッド)で、北側に張り出すように屈曲する形状となる。溝幅は約3～3.5m、屈曲部で最大4mを測る。深さは、0.7～1.1mである。断面形状は逆台形で、周壁は外傾して立ち上がる。底面は掘方埋土でほぼ平坦に整えられており、屈曲部を境に双方に緩やかに傾斜している。掘方は、屈曲部は起伏が顕著で、ほかは浅い段状に掘られている。

〔堆積土〕 土層観察地点で多少異なるが、黒褐色土を主体にした土で4～11層に分けられる。層中にローム粒や炭化物粒を混合する。砂や火山灰の堆積・混入は確認できなかった。壁面・底面付近の層は混合するロームの粒径が大きく塊状であることから、周壁の崩落土層と推測する。それ以外の層は



第22号竪穴建物跡 (S122)

- 第1層 10YR3/2 黒褐色土 10YR5/8黄褐色ローム粒($\phi \sim 10\text{mm}$)3%、炭化物粒($\phi \sim 3\text{mm}$)1%、5YR7/8橙色焼土粒($\phi \sim 3\text{mm}$)1%混合。
- 第2層 10YR3/2 黒褐色土 10YR5/8黄褐色ローム粒($\phi \sim 20\text{mm}$)3%、炭化物粒($\phi \sim 10\text{mm}$)1%、5YR7/8橙色焼土粒($\phi \sim 5\text{mm}$)1%混合。
- 第3層 10YR2/3 黒褐色土 10YR5/8黄褐色ローム塊($\phi \sim 30\text{mm}$)10%、炭化物粒($\phi \sim 15\text{mm}$)1%混合。
- 第4層 10YR3/1 黒褐色土 10YR5/8黄褐色ローム塊($\phi \sim 50\text{mm}$)20%混合。層方埋土。
- Pit 1~4
埋土 10YR2/1 黒色土 10YR5/8黄褐色ローム粒($\phi \sim 20\text{mm}$)3%、炭化物粒($\phi \sim 3\text{mm}$)2%、2.5YR5/8明赤褐色焼土粒($\phi \sim 2\text{mm}$)1%混合。

床面焼土跡

- 第1層 5YR4/6 赤褐色土 第V層の被熱層(面)
- 第2層 10YR6/6 明黄褐色ローム質土 第V層の被熱層(面)。

第18号溝跡 (SD18)

- 第1層 10YR5/3 にぶい黄褐色土 10YR7/4 黄褐色土粒($\phi \sim 20\text{mm}$)1%、炭化物粒($\phi \sim 3\text{mm}$)1%混合。SD18土層A-A'の1層に相当。
- 第2層 10YR3/2 黒褐色土 10YR5/8黄褐色ローム粒($\phi \sim 7\text{mm}$)2%、炭化物粒($\phi \sim 2\text{mm}$)1%混合。SD18土層A-A'の5層に相当。
- 第3層 10YR2/3 黒褐色土 10YR5/8黄褐色ローム塊($\phi \sim 7\text{mm}$)5%、炭化物粒($\phi \sim 5\text{mm}$)1%、5YR4/8赤褐色焼土粒($\phi \sim 3\text{mm}$)1%混合。

図5 第22号竪穴建物跡

人為堆積(埋戻)土と考えられ、乾燥すると白色化する。土層断面A-A'の10層は掘方埋土である。また、3層は硬化している。屈曲部西側の堆積土中で焼土を確認した。規模は63cm×36cm・焼土厚は約6cmで、位置や層位から埋戻土中に混入した廃棄焼土とも考えられたが、焼土はムラがなく均一であるため、埋戻(埋戻)過程の凹地で形成した焼土である可能性も捨てきれない。

[出土遺物] 堆積土から次の遺物が出土している。土器類では、縄文土器1点3.8g、擦文(系)土器1点4.0gを含む土師器片225点2,195.5g。焼成粘土塊3点2.6g、土製支脚3点623.4g、鉄製品5点89.4g、羽口(溶融物付含む)17点99.6g、鉄滓12点397.1g。石器類では、縄文時代の石鏃1点0.6g、剥片1点12.3g、スリ石1点546.2g、凹石1点386.1g、帰属時期不明の台石4点12,309.6g。これらは堆積土中から散漫に出土するが、土器、土製品類と鉄製品類は特に屈曲部西側にあたるⅢA-27～ⅢB-28グリッドからの出土が多い。また、上記石器類の他に円礫および扁平礫がおおよそ420個(10cm以下285、20cm以下32、20cm以上14、20cm以下の破砕礫43、20cm以上の破砕礫46)が、堆積土の中位から下位にかけて全体的に出土している。この内、明確に被熱しているものが50個ある。破砕礫の表面が赤変したものは少ないが被熱により破砕した可能性がある。

図11-1～30は土師器である。1～26は甕で、1～16は口縁部、17は頸部、18～22は胴部、23～26は底部である。頸部は短い。口縁部が「く」の字状に外反するもの(1～4・6・17)と、口縁部まで直線的に立ち上がるもの(9～13)とがある。口唇形状は、丸いもの(1～3・5・6・8～10・13～16)、玉縁状のもの(4・7)、尖るもの(11・12)がある。器面は摩耗が激しく、調整の観察は困難なものが多いが、観察できる限りでは、外面は縦位方向のケズリもしくはナデ、内面は横～斜位方向のナデ、外底面はナデが卓越する。胎土中に3mm程度の小礫を含む。焼成はやや硬質なものや軟質なものがある。器面が赤褐色で脆いものがあり、二次被熱と考えられる。22は器壁が薄く、18は胎土中に小礫が混入しないものである。27・28は小型土器(ミニチュア)の底部である。平底で、27は底部のほとんどが剥落している。器面調整はナデである。胎土は粒子が細かく、小礫を含まない。焼成はやや軟質である。27は器壁が厚い。28は内面が剥落している。29・30はともに底部片で、焼成前の貫通孔があることから甕の可能性が高い。器面調整はナデである。胎土は粒子が細かく、小礫を含まない。焼成はやや軟質である。器面・断面ともに赤褐色をしており、被熱により変色した可能性がある。29の器壁は薄い、内面が剥落している可能性がある。

図11-31～33は製塩土器の胴部片で、31は頸部付近と思われる。小片であり、器形がわかるものはない。器面は摩耗が激しく、調整の観察は困難であるが、観察できる限りでは、器面調整はユビアト・ナデで、内面はナデが丁寧に施されている。外面は輪痕が明瞭で、胎土は甕に比して粗い。32は甕のような小礫を含む。焼成は軟質である。器面・断面ともに被熱によって赤褐色をしており、32は内面が剥落している。

図11-34は擦文(系)土器である。口唇部付近の口縁部片で、端部が受け口状に内湾する。外面に沈線が2条巡る。胎土は粒子が細かく、小礫を含まない。焼成はやや硬質である。内面は黒色である。

図12-1～3は土製支脚である。1は支・脚部、2・3は体部である。支・脚部はほぼ円形、体部は全て多角柱状である。器面調整は、支・脚部がユビアト・ナデ、体部はユビアト・ケズリである。内孔は全て楕円状で、体部の中心からはずれて穿孔されている。胎土は甕に比して粗く、小礫を含む。焼成は硬質である。器面・断面ともに二次被熱によって赤褐色を呈しており、脆い。

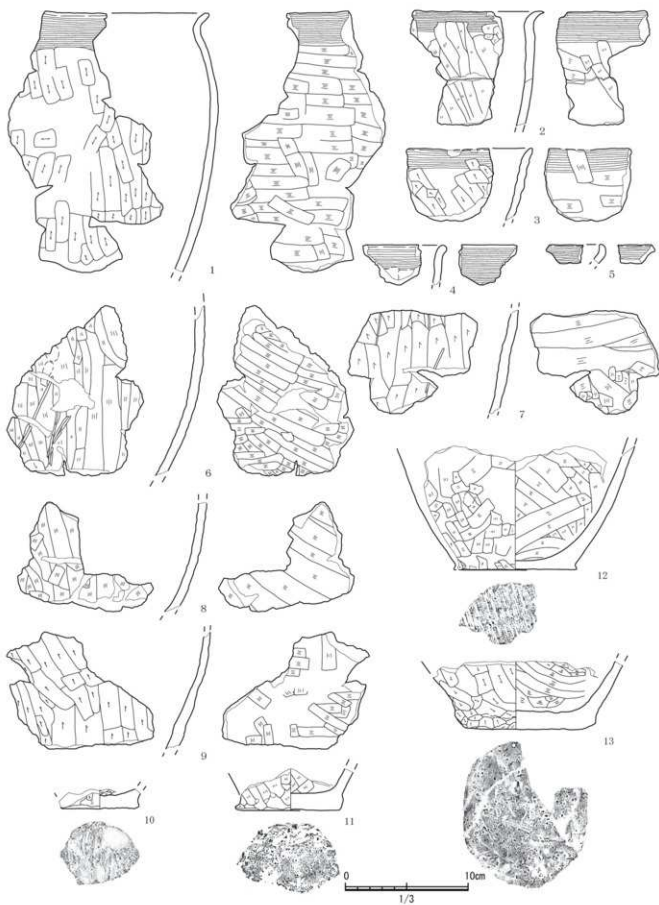


图6 第22号竖穴建物跡出土遺物(1)

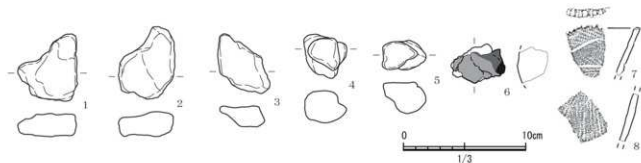


図7 第22号竪穴建物跡出土遺物(2)

鉄生産関連遺物は鉄製品・羽口・鉄滓がある。図12-4～8は鉄製品である。4・5・7は刀子の茎と推定される。6は棒状のもので、紡錘車の軸の可能性がある。8はやや厚い円盤状の鉄製品である。用途は不明である。鉄滓は10点を図示した(図12-9～18)。9・10・14は楕形鍛冶滓である。表面は褐灰色で、密で重い。全て破片であり、滓中の鉄を取り出すために割られた可能性がある。9は含鉄のもので、上下二段に重なっている。10は底部に砂礫が付着している。14は器面全体が錆化している。11～13・15～18は鍛冶滓である。楕形鍛冶滓に比して小さい。表面は褐灰色もしくは赤褐色で、細かい発泡が顕著である。11・12・13・18は含鉄で、比較的軽く、赤褐色をしているものが多い。羽口は6点を図示した(図12-19～24)。19～21は羽口の先端部付近の破片で、被熱により変色・溶解した箇所が認められる。22～24は羽口溶解物である。低密度で軽い。表面は褐灰色で、部分的に光沢があり、細かい発泡が顕著である。

図12-25は胎土に海綿骨針を含む早期前葉の土器片である。図12-26は近世の瀬戸美濃と推定される陶器碗である。

図12-27は薄手小型の凸基有茎鐵で、両側縁が鋸歯状側縁になっている。28は横長剥片で、腹面右縁辺上部に微細な連続剥離がみられる。図13-1は扁平楕円形礫素材のスリ石である。両器面と一側縁に弱いスリ痕跡と、両側縁と一端部(上方)に敲打の痕跡がみられる。2は凹石で、扁平礫の両器面中央に、敲打による浅い凹みが形成されている。3～7は小円礫である。3の側縁の一部に僅かに敲打痕跡がみられる以外は明瞭な使用痕跡は見られないが、器面が平滑であることから使用されている可能性がある。図13-8～図14-3は台石である。図13-8は両面が使われており、中部にスリ痕跡がみられる。裏面側には一条の刻線もある。図14-1～3は一器面が使用されるものであるが、スリの痕跡は明瞭ではない。1は扁平礫の一面全体が平滑である。2と3も使用の痕跡は同様であり、ともに被熱している。

[小結] 出土土器や遺構の形状・周辺遺構の配置状況等から平安時代の10世紀後葉のものと思われる。炭化物2点について放射性炭素年代測定を行ったところ(第4章第1節参照)、11世紀中頃～13世紀前半と13世紀後半～14世紀後半の分析結果が得られた。炭化木材が実際に枯死もしくは伐採されたのは分析結果の年代よりも新しい時期と考えられることから、本溝跡は平安時代以降も埋まりきらずに開口しており、鎌倉時代以降に礫や遺物が混入した土で埋戻されたと推測する。(平山・小田川)

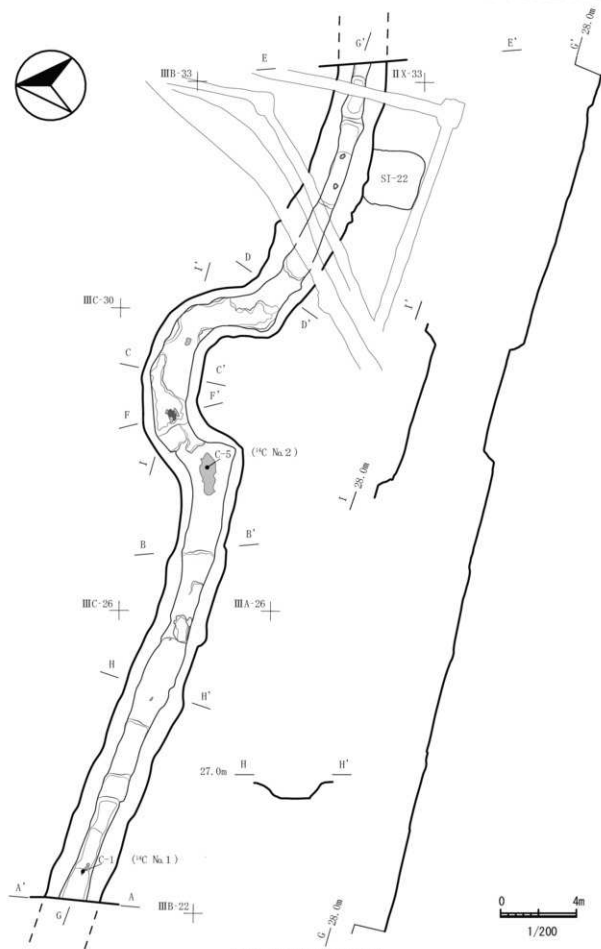
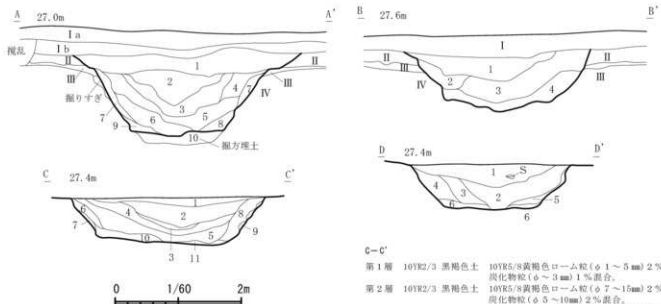


図8 第18号溝跡(1)



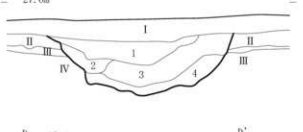
A-A'

- 第1層 10YR3/3 暗褐色土 10YR5/8黄褐色ローム粒(φ 2~5mm) 5%、炭化物粒(φ 2~7mm) 2%混合。乾燥時白色化。
- 第2層 10YR3/4 暗褐色土 10YR5/8黄褐色ローム粒(φ 1~7mm) 3%、炭化物粒(φ 2~5mm) 1%混合。乾燥時白色化。
- 第3層 10YR3/3 暗褐色土 10YR5/8黄褐色ローム粒(φ 1~7mm) 7%、炭化物粒(φ 2~5mm) 2%混合。緻密で硬化。
- 第4層 10YR3/3 暗褐色土 10YR5/8黄褐色ローム粒(φ 1~5mm) 5%、炭化物粒(φ 2~5mm) 1%混合。
- 第5層 10YR3/2 黒褐色土 10YR5/8黄褐色ローム粒(φ 2~10mm) 3%、炭化物粒(φ 1mm) 1%混合。
- 第6層 10YR2/3 黒褐色土 10YR5/8黄褐色ローム粒(φ 5~30mm) 3%、炭化物粒(φ 1mm) 1%混合。
- 第7層 10YR2/2 黒褐色土 10YR5/8黄褐色ローム粒(φ 1~5mm) 3%、炭化物粒(φ ~2mm) 1%混合。黒色土粒層中に多い。
- 第8層 10YR3/2 黒褐色土 10YR5/8黄褐色ローム塊(φ 5~20mm) 3%、炭化物粒(φ ~2mm) 1%混合。赤色土粒層中に多い。
- 第9層 10YR2/3 暗褐色土 10YR5/8黄褐色ローム塊(φ 5~20mm) 3%、炭化物粒(φ ~2mm) 1%混合。
- 第10層 10YR5/8 黄褐色ローム質土 10YR5/6黄褐色ローム塊主体。10YR3/2黒褐色土粒が混合。層上部は互層に堆積。組方埋土。

B-B'

- 第1層 10YR2/3 黒褐色土 10YR5/8黄褐色ローム粒(φ 1~5mm) 2%、炭化物粒(φ 1~5mm) 1%混合。
- 第2層 10YR5/8 黄褐色ローム質土 10YR5/8黄褐色ローム粒(φ 3~15mm)と10YR3/4暗褐色土の混合層。壘積落土主体の層。
- 第3層 10YR2/3 黒褐色土 10YR5/8黄褐色ローム粒(φ 1~5mm) 3%、炭化物粒(φ 1~5mm) 1%混合。3層との層理付合にローム塊多。
- 第4層 10YR3/1 黒褐色土 10YR5/8黄褐色ローム粒(φ 1~10mm) 7%、炭化物粒(φ 1~3mm) 1%混合。堅く緻密。乾燥時白色化しやすい。

B-B'



C-C'

- 第1層 10YR2/3 黒褐色土 10YR5/8黄褐色ローム粒(φ 1~5mm) 2%、炭化物粒(φ ~3mm) 1%混合。
- 第2層 10YR2/3 黒褐色土 10YR5/8黄褐色ローム粒(φ 7~15mm) 2%、炭化物粒(φ 5~10mm) 2%混合。黒色土が強く炭化物は層下部にまとまる。
- 第3層 10YR3/2 黒褐色土 10YR5/8黄褐色ローム塊(φ 1~5mm) 2%、炭化物粒(φ ~3mm) 1%混合。褐色土強し。
- 第4層 10YR3/3 暗褐色土 10YR5/8黄褐色ローム粒(φ 3~5mm) 2%、炭化物粒(φ ~3mm) 1%混合。10YR4/3に多い黄褐色土も混入。乾燥時白色化。
- 第5層 10YR3/2 黒褐色土 10YR5/8黄褐色ローム塊(φ 3~5mm) 5%、炭化物粒(φ 3~10mm) 2%混合。層上部にまとまる。黒色土強く、乾燥時白色化。
- 第6層 10YR3/3 暗褐色土 10YR5/8黄褐色ローム粒(φ 1~10mm) 3%、炭化物粒(φ ~1mm) 1%混合。壘積落土10YR5/6黄褐色ローム塊(φ ~50mm)混合。
- 第7層 10YR5/8 黄褐色ローム質土 壘積落土塊
- 第8層 10YR3/1 黒褐色土 10YR5/8黄褐色ローム粒(φ 1~7mm) 3%、炭化物粒(φ 1~3mm) 2%混合。壘積落土。10YR5/6黄褐色ローム塊(φ ~30mm)混合。
- 第9層 10YR5/8 黄褐色ローム質土 壘積落土塊
- 第10層 10YR3/2 黒褐色土 10YR5/8黄褐色ローム塊(φ 1~15mm) 2%、炭化物粒(φ ~3mm) 1%混合。層上位に黒色土。下位に褐色土堆積。
- 第11層 10YR3/1 黒褐色土 10YR5/8黄褐色ローム粒(φ 1~10mm) 3%、炭化物粒(φ ~1mm) 1%混合。壘積落土10YR5/6黄褐色ローム塊(φ ~50mm)混合。

D-D'

- 第1層 10YR2/2 黒褐色土 10YR5/8黄褐色ローム粒(φ 1~5mm) 1%、炭化物粒(φ ~3mm) 1%混合。黒色土粒層中に多い。
- 第2層 10YR2/3 黒褐色土 10YR5/8黄褐色ローム粒(φ 1~15mm) 3%、炭化物粒(φ ~5mm) 1%混合。乾燥時白色化。
- 第3層 10YR2/3 黒褐色土 10YR5/8黄褐色ローム粒(φ 1~5mm) 3%、炭化物粒(φ ~3mm) 1%混合。
- 第4層 10YR3/2 黒褐色土 10YR5/8黄褐色ローム粒(φ 1~7mm) 3%、炭化物粒(φ ~3mm) 2%混合。黄褐色ローム塊(φ ~30mm)層理と垂直に多く堆積。
- 第5層 10YR3/2 黒褐色土 10YR5/8黄褐色ローム粒(φ 1~3mm) 2%、炭化物粒(φ ~3mm) 2%混合。黄褐色ローム塊(φ ~30mm)壘の混合土。
- 第6層 10YR3/2 黒褐色土 10YR5/8黄褐色ローム粒(φ 1~5mm) 3%、炭化物粒(φ ~3mm) 2%混合。黄褐色ローム塊(φ ~5mm)壘の混合土。

図9 第18号溝跡(2)

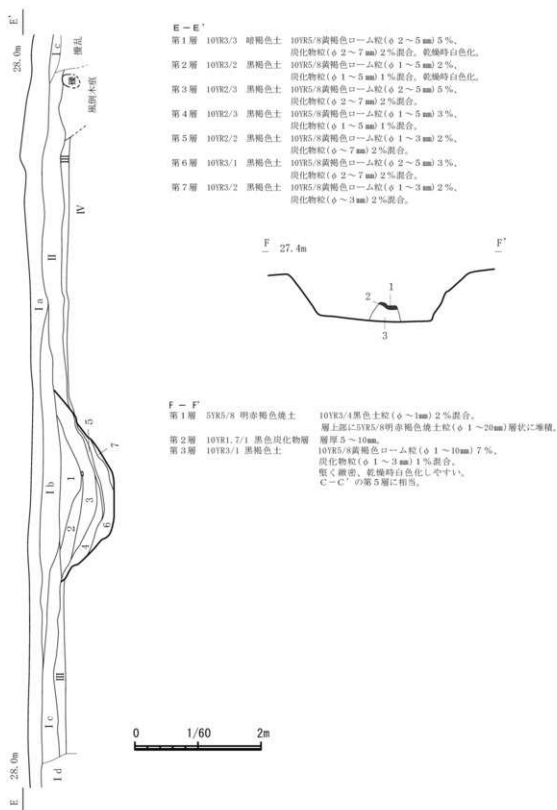


図10 第18号溝跡(3)

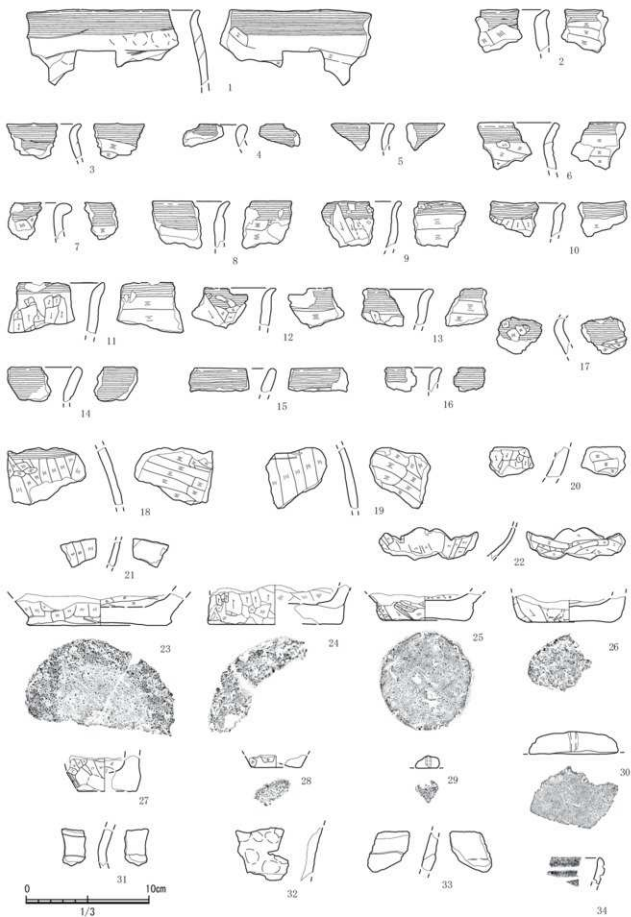


图 11 第 18 号满跡出土遺物 (1)

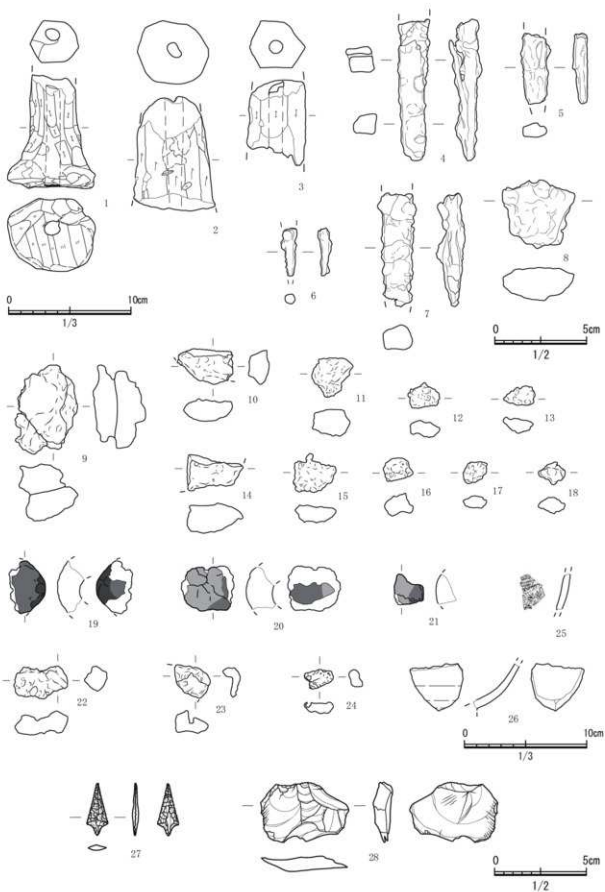


图12 第18号满跡出土遺物(2)

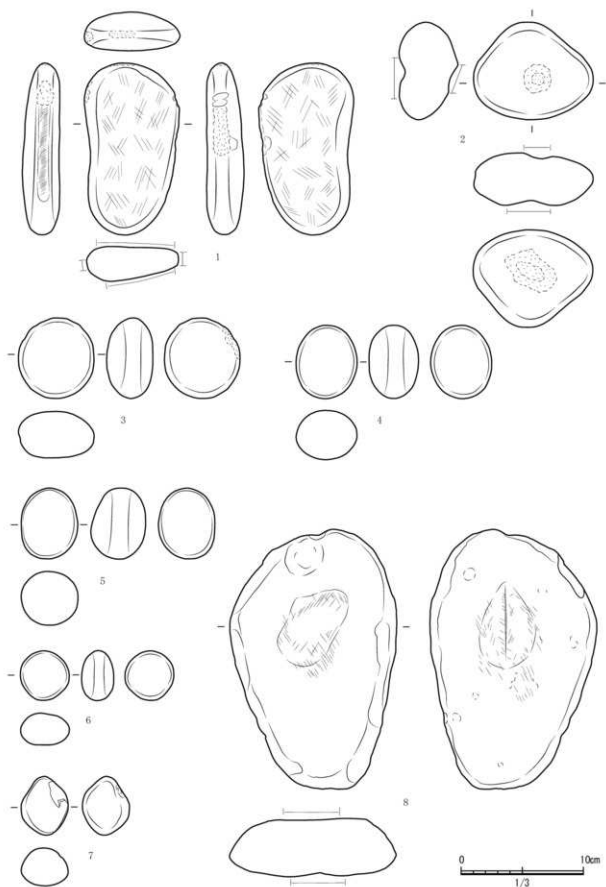


图13 第18号溝跡出土遺物(3)

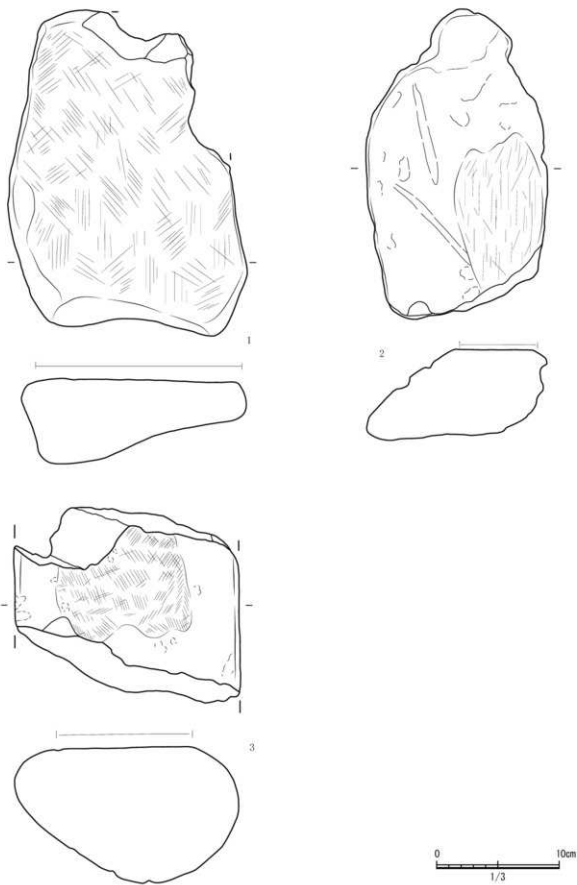


图14 第18号溝跡出土遺物(4)

第2節 遺構外出土遺物

縄文土器 (図15-1~4、写真11)

遺構外からは4点出土した。すべて縄文施文の胴部破片で、1は無文、2と3はRLが、4は0段多条RLが施文される。1・2の胎土には海綿骨針、3には僅かに繊維の混入がみられる。1は縄文時代早期、2・4は縄文時代中期以降、3は縄文時代前期の年代が考えられる。(小田川)

土師器 (図15-5~19、写真11)

987.3g出土し、うち、15点を図示した。器種は甕・小型土器(ミニチュア)で、坏は出土しなかった。5~18は甕で、5~9は口縁部、10~14は胴部、15~18は底部である。いずれも小片であり器形は判然としない。頸部は短く、口縁部まで直線的に立ち上がるもの(5~7)と、頸部がくびれて口縁部は「く」の字状に外反するもの(8・9)とがある。口唇形状は、平坦に整えられているもの(5・6)と、丸いもの(7~9)とがある。底部の18は外に張り出す。器面は摩耗が激しく、調整の観察は困難なものが多い。観察できたものでは、外面は縦~斜位方向のケズリもしくはナデ、内面は横~斜位方向のナデが多い。外底面も多くがナデと思われるが、剥落しているものが多い。8~18は胎土中に3mm程度の小礫を含む。焼成はやや硬質なものや軟質なものがある。器表面や断面が赤褐色で脆いものがあり、特に6は顕著で器面が剥落している。6は製塩土器、7は小型土器の可能性があり、19は小型土器の口縁部片である。頸部は短く、口縁部は「く」の字状に外反する。器面調整はユビアトである。胎土は粒子が細かく、甕のような小礫を含まない。器壁は薄く、焼成はやや軟質である。内面のほとんどが剥落している。平安時代の10世紀後葉のものと思われる。

製塩土器 (図15-20~22、写真11)

38.8g出土し、うち、3点を図示した。20は口縁部、21・22は胴部片である。小片であり、器形がわかるものはないが、口縁部や胴部の傾きから、直線的に外反するバケツ状の器形を呈するものと推定される。器面調整はナデであるが、器面は摩耗が激しく、調整の観察は困難なものが多い。外面は輪積痕が明瞭である。また、内面のナデは丁寧な施されている。口唇部は平坦に整えられている。胎土中に甕のような小礫を含むものの、密度は甕に比して粗い。焼成は軟質である。器面・断面ともに被熱によって赤褐色をしており、脆い。

須恵器 (図15-23、写真11)

1点36.7g出土した。甕の口縁部で、推定口径は45.4cmである。外面の頸部付近にはタタキ痕跡が認められる。五所川原須恵器窯跡群産で、前期2期(10世紀第1~第2四半期)以降と推定される(五所川原市教育委員会2023)。

土製品 (図15-24)

土製支脚と焼成粘土塊が出土した。土製支脚は1点30.8g出土した。支・脚部片である。体部は多角柱状、支・脚部は円形と思われる。体部の器面調整はケズリである。支・脚部は摩耗が激しい。内孔は体部のほぼ中心に穿孔されている。胎土は粗く、甕同様に小礫を含む。焼成は軟質であるが、被

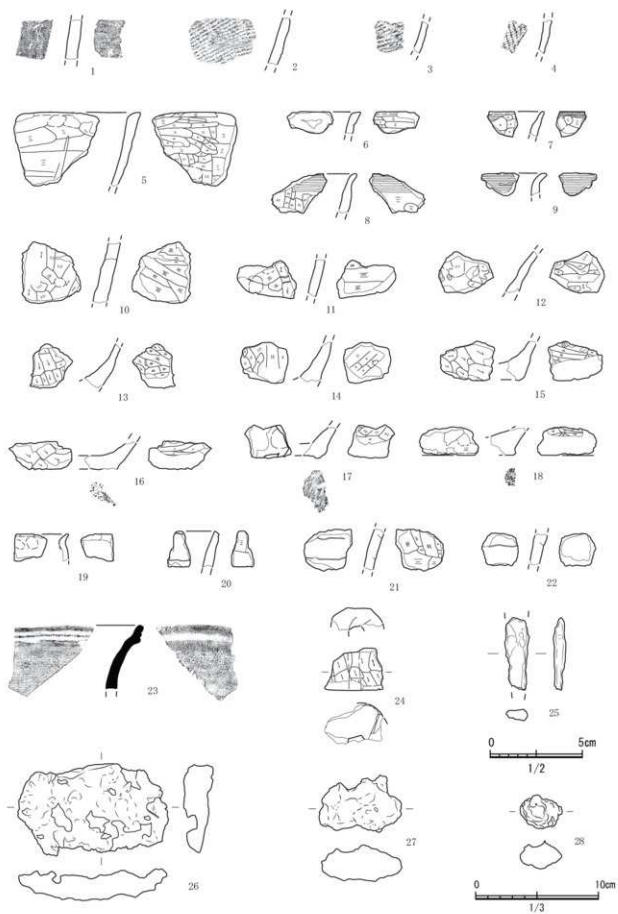


図15 遺構外出土遺物(1)

熱により脆くなっている。断面には、形成の際の接合痕が認められる。焼成粘土塊は攪乱中から1点7.6g出土したが、図示しなかった。

鉄生産関連遺物 (図15-25～28、写真11)

鉄生産関連遺物は鉄製品と鉄滓が出土した。鉄製品は1点5.7g出土した。25は扁平な棒状の鉄製品である。用途は不明であるが、刀子の茎の可能性がある。鉄滓は3点420.9g出土した。26は碗形鍛冶滓である。含鉄のもので、密で重い。器面全体は赤褐色をしているが、断面は褐灰色である。27・28は鍛冶滓である。表面は褐灰色もしくは赤褐色である。27は含鉄のもので、密で重い。28は密度も軽く、軽く感じる。

中～近世の陶磁器類 (図16-1～20、写真12)

中世の陶器と近世の磁器・陶器・土師質土器が出土した。中世陶器は1点108.0g出土した(図16-1)。珠洲産摺鉢で、底部に近い胴部片である。卸目は幅2.5cm幅・9条で、密着して施されている。珠洲V期(15世紀代)の年代が推定される(吉岡1994)。

近世磁器は碗(2～11・13～15)と皿(12・16)が出土した。碗は、2～6が口縁部、7～9が胴部、10・11が腰部、13～15が底部である。見込みや外面に圏線が、また、花卉(2・15)、雨降り文(4)、卍文(7)、コンニャク印判(8・11)、山水文(10)が施されるものがある。5は赤絵である。内面には圏線と雷文が呉須で描かれており、外面には圏線が呉須で、松?と牡丹?が緑と朱で描かれている。14は肥前Ⅲ～Ⅳ期(1650～1780年代)、2～4・6～9・11・15は肥前Ⅳ期(1690～1780年代)、13は肥前Ⅳ～Ⅴ期(1690～1860年代)、5・10は肥前Ⅴ期(1780～1860年代)の年代が考えられる。皿は、12が口縁～腰部、16が口縁～底部である。推定口径は、12が16.6cm、16が13.4cmである。見込みには花卉のほかに、16は見込みに網目文と圏線が、外面と高台内に圏線が描かれている。16は器面に光沢がなく、白濁していることから、被熱が考えられる。ともに肥前Ⅳ期(1690～1780年代)の年代が考えられる(大橋1993・九州近世陶磁学会2000)。

近世陶器は皿(17)と袋物(18・19)が出土した。皿は肥前(唐津)の底部である。底径は4.6cmで、内外面に灰軸が施されている。見込みに蛇の目軸刺ぎと鉄絵が見られる。高台は削り高台で露胎となっており、高台内は兜巾状の高まりが認められる。肥前Ⅳ期(1690～1780年代)と考えられる(大橋1993・九州近世陶磁学会2000)。袋物は徳利の胴部(18)と底部(19)である。胴部は底部からやや内湾気味に立ち上がる。ロクロ成形で、高台は削り高台である。外面に灰白色・内面に褐色の釉が施されている。高台は露胎であるが、高台内は施軸されている。窯印はないものの、越後産焼酎徳利の可能性があり、近世末から明治と考えられる(関根・木戸2018)。

近世の土師質土器(20)は灯火受付皿・灯明受皿・油受け皿等と呼称されているものである。ほぼ完形に復元できた。ロクロ整形で、胴部下半はロクロ回転利用のケズリが施されている。また、底外面は基筒底状になっている。受け(内皿)の開口部(切れ込み)はV字もしくはL字状のものが3ヶ所作り出されており、受けの口縁部は細かく打ち欠かされている。なお、図示しなかったが、産地および時期不明の陶器摺鉢や近代以降の磁器碗も出土している。(平山)

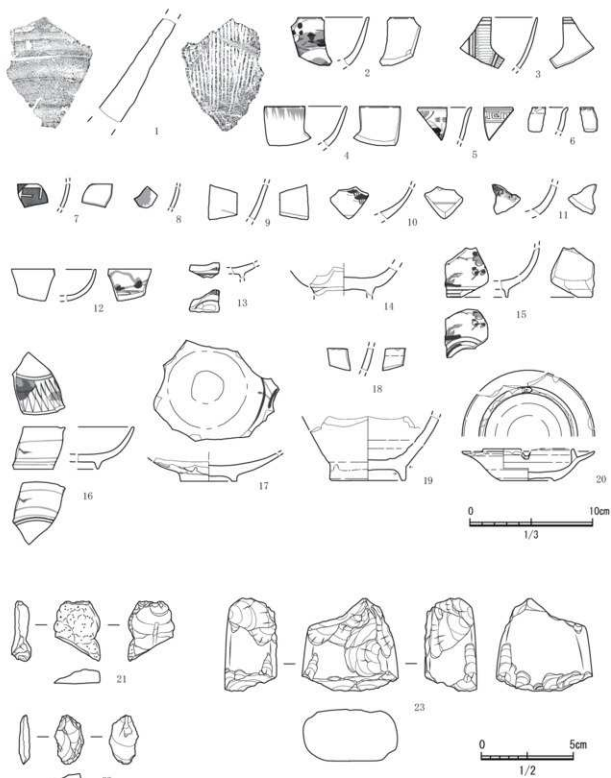


図16 遺構外出土遺物(2)

石器(図16-21~23、写真12)

遺構外からは剥片2点・破砕片1点、剥離礫1点が出土した。破砕片を除く3点を図示した。21・22ともに両極技法による剥片である。21の図下方側は破断している。23は扁平礫の上下と両側縁から剥離が施されている。何のための剥離であるか不明である。

(小田川)

第4章 自然科学分析

第1節 放射性炭素年代測定

株式会社 パレオ・ラボ

1. はじめに

上北郡横浜町の林ノ脇遺跡から出土した試料について、加速器質量分析法 (AMS法) による放射性炭素年代測定を行った。

2. 試料と方法

試料は、第18号溝跡 (SD18) から出土した炭化材2点 (試料No.1, 2: PLD-47327, 47328) である。どちらも最終形成年輪は残存しておらず、部位不明である。

測定試料の情報、調製データは表1と2のとおりである。試料は調製後、加速器質量分析計 (パレオ・ラボ、コンパクト AMS: NEC製 1.5SDH) を用いて測定した。得られた¹⁴C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、¹⁴C年代、暦年代を算出した。

表1 測定試料および処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	推定時期	前処理データ	前処理
PLD-47327	グリッド: ⅢC-22 遺構: SD18 層位: A-A'6層上面 相当 遺物No.C-1 試料No.1	種類: 炭化材 試料の性状: 最終形成年輪以外、部位不明 状態: dry	不明	前処理前重量: 31.90mg 燃焼量: 5.36mg 精製収量: 2.80mg 炭素回収率: 0.96mg	超音波洗浄 有機溶剤処理: アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸: 1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム: 1.0 mol/L, 塩酸: 1.2 mol/L)
PLD-47328	グリッド: ⅢA-27 遺構: SD18 層位: C-C'5層相当 遺物No.C-5 試料No.2	種類: 炭化材 試料の性状: 最終形成年輪以外、部位不明 状態: dry	不明	前処理前重量: 30.85mg 燃焼量: 5.50mg 精製収量: 3.20mg 炭素回収率: 0.96mg	超音波洗浄 有機溶剤処理: アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸: 1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム: 1.0 mol/L, 塩酸: 1.2 mol/L)

3. 結果

表2に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比 ($\delta^{13}\text{C}$)、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した¹⁴C年代、図1に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下1桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

¹⁴C年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。¹⁴C年代 (yrBP) の算出には、¹⁴Cの半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した¹⁴C年代誤差 ($\pm 1\sigma$) は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の¹⁴C年代がその¹⁴C年代誤差内に入る確率が68.27%であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の¹⁴C濃度が一定で半減期が5568年として算出された¹⁴C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の¹⁴C濃度の変動、および半減期の違い (¹⁴Cの半減期5730

±40年)を校正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

^{14}C 年代の暦年校正にはOxCal4.4(校正曲線データ:IntCal20)を使用した。なお、1 σ 暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された ^{14}C 年代誤差に相当する68.27%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に2 σ 暦年代範囲は95.45%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は ^{14}C 年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年校正曲線を示す。

表2 放射性炭素年代測定および暦年校正の結果

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年校正用年代 (yrBP ± 1 σ)	^{14}C 年代 (yrBP ± 1 σ)	^{14}C 年代を暦年代に校正した年代範囲	
				1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
PLD-47327 SD18, A-A'6層上 面相当 試料No.1	-25.20 ± 0.28	880 ± 20	890 ± 20	1158-1182 cal AD (33.79%) 1185-1213 cal AD (34.48%)	1049-1081 cal AD (17.80%) 1135-1136 cal AD (0.17%) 1152-1220 cal AD (77.42%)
PLD-47328 SD18, C-C'5層相当 試料No.2	-25.32 ± 0.29	717 ± 20	715 ± 20	1276-1289 cal AD (68.27%)	1269-1299 cal AD (93.95%) 1373-1376 cal AD (1.50%)

4. 考察

以下、各試料の暦年校正結果のうち2 σ 暦年代範囲(確率95.45%)に着目して結果を整理する。

SD18の4層上面出土の炭化材(試料No.1:PLD-47327)は、1049-1081 cal AD (17.86%)、1135-1136 cal AD (0.17%)、1152-1220 cal AD (77.42%)の暦年代範囲を示した。これは11世紀中頃～13世紀前半で、平安時代中期～鎌倉時代に相当する。SD18の4層出土の炭化材(試料No.2:PLD-47328)は、1269-1299 cal AD (93.95%)および1373-1376 cal AD (1.50%)の暦年代範囲を示した。これは13世紀後半～14世紀後半で、鎌倉時代～室町時代に相当する。

木材は最終形成年輪部分を測定すると枯死もしくは伐採年代が得られるが、内側の年輪を測定すると内側であるほど古い年代が得られる(古木効果)。今回測定した試料は、いずれも最終形成年輪が残存しておらず、残存している最外年輪のさらに外側にも年輪が存在していたはずである。したがって、木が実際に枯死もしくは伐採されたのは、測定結果の年代よりもやや新しい時期であったと考えられる。

(AMS年代測定グループ)

伊藤 茂・加藤和浩・廣田正史・佐藤正教・山形秀樹・Zaur Lomtadize・黒沼保子)

参考文献

Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. Radiocarbon, 51 (1) , 337-360.

中村俊夫(2000)放射性炭素年代測定法の基礎。日本先史時代の ^{14}C 年代編集委員会編「日本先史時代

の¹⁴C年代」：3-20, 日本第四紀学会.

大森貴之・山崎孔平・椛澤貴行・板橋 悠・尾畷大真・米田 稷 (2017) 微量試料の高精度放射性炭素年代測定, 『第20回AMSシンポジウム』:55, 国立研究開発法人日本原子力研究開発機構 核燃料・バックエンド研究開発部門 東濃地科学センター.

Reimer, P.J., Austin, W.E.N., Bard, E., Bayliss, A., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Butzin, M., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hajdas, I., Heaton, T.J., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kromer, B., Manning, S.W., Muscheler, R., Palmer, J.G., Pearson, C., van der Plicht, J., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Turney, C.S.M., Wacker, L., Adolphi, F., Büntgen, U., Capano, M., Fahrni, S.M., Fogtmann-Schulz, A., Friedrich, R., Köhler, P., Kudsk, S., Miyake, F., Olsen, J., Reinig, F., Sakamoto, M., Sookdeo, A. and Talamo, S. (2020) The IntCal20 Northern Hemisphere radiocarbon age calibration curve (0–55 cal kBP) . Radiocarbon, 62 (4) , 725–757, doi:10.1017/RDC.2020.41. <https://doi.org/10.1017/RDC.2020.41> (cited 12 August 2020)

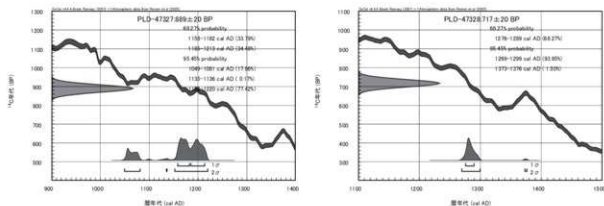


図1 暦年較正結果

第5章 総括

第1節 縄文時代および弥生時代の林ノ脇遺跡

本調査で検出した縄文時代の遺構は溝状土坑が5基である。これについては、2019年度調査（青森県教育委員会2021a）および第634集調査（青森県教育委員会2023）で検出したものと、相互に関連し合っていることから後述する。

遺物は、弥生土器が平安時代の第22号堅穴建物跡堆積土から2点、遺構外から3点出土した。いずれも細片で中期以降に比定される。石器類は石鏃、剥片、スリ石、凹石が第18号溝跡堆積土から出土している。すべて流入したもので帰属時期も特定できない。同様に台石も4点出土しているが、縄文時代のものか平安時代のもか断定できない。

前回調査分比べ、遺構遺物ともに極端に少なく、縄文時代の積極的な活動が三保川縁辺から50m以内の範囲に限られることがわかった。ただし狩猟に関わる営みだけが、縄文時代のおそらく中期以降も散漫ではあるが継続されていることが判明した。今回、弥生時代に比定される遺構は全くなく、前回調査で検出した遺構もごく局所的な営みであったことがわかった。

第2節 溝状土坑

今回本事業で検出した溝状土坑5基と前回の調査で検出された42基、および隣接する第634集調査区で検出した4基を合わせた51基をもとに記述する。

前回調査の報告書でも述べられているように、落とし穴とされる本遺構については調査の増加により検出数も相当数増えており、これまでにその形態や配置、構築時期などについて多数論じられている。各発掘調査報告書でも細かく分類分析されており、八戸市岩ノ沢平遺跡などの大型な特異例を含めても、長軸と短軸や深さなどの数値の差異から、その機能用途が大きく変わることはない。また、調査時点で、後世の削平などの影響を考慮することもなく、規模の大小（長短）などの数値の近似値を規格性があるものとして捉え、同時存在と見なすことは短絡的であり、さらに断面形状にみられるオーバーハングなどが構築者の意図した決り込みなのか崩落したものなのかの判断も明確ではないままに、その類似性だけをもって、それらを同時期性として捉えることは危ういと考えられる。機能においても単一的機能と複数的機能、一方なのか双方が同時に機能したものなのかの検証も難しい。しかし機能については、概ね後者に優位性が高く、対象獣もシカに特化した可能性があると認識されているのが本遺構に対する現状ではなからうか。

本県の溝状土坑については、上記の事項および研究史を含め、福田友之が県全域の検出事例を集成検討し論じている（福田2018）ほか、永嶋豊も当該地域の発掘調査例を基に論じている（青森県教育委員会2002・2003）。その中で、類例の増加による蓄積された分析も現状では実像に迫るまでには及ばない点も強調している。正に想像と推定によるところが大きいものの、我々が近寄れる要因の一つに、構築者の意図が強く反映されたと思われる、掘り込み位置と主軸（長軸）方向や各々の距離間（距離感覚）から得られるいわゆる配置であろう。想定される配置も、複数基の同時期機能を仮定するにとどまらば、凡そ地形と各遺構の間隔や傾きなどから考慮されたものとなる。

配置については、前回の報文でもいくつか記述されており、三保川に近接して密な一群とその北側に散在する一群に分けた中から、複数の列を抽出している。今年度の検出数を加えて再度配置をみると捉え方も次のように多様となる。その内の一つにSV36-SV22-SV09で構成される東西方向の列も、今回の検出遺構を加えてみると、SV36を起点にSV36-SV51-SV49の南北列で捉えることもできる。他に等間隔の東西列としては、SV44-SV48-SV49の並びもあり、SV43の北側にも遺構を想定すれば、SV45-SV43の列もあり得るだろう。また、密な一群のなかで主軸方向が異なるSV39とSV17-SV18-SV19を区分している点で、SV17-19を単位としてみた場合、SV38-SV03-SV02、SV08-SV07-SV11など3基単位としての構築も想定される。総数664基が調査された発茶沢遺跡の報文(埋文報第120集)にも、「10数基が並ぶ列でも基本的に2列一単位の集合体と考えられるものがある」と述べられており、当該遺構の用い方に多様性があることも窺える。このように傾きを基にしてみると、SV46-SV50の主軸(長軸)方向は明らかに異なり概ね東西方向に主軸をとるものであり、このような場合、南北方向に主軸をとる他の溝状土坑とは、構築時期ないしは構築者の違いを想定してしまう。

いうまでもなく溝状土坑の特徴は、長狭な穴というその形状にある。おそらく獣道に沿って構築されたであろう畷であれば、構築者はその道筋を念頭に配置したものと推測され、主軸(長軸)の向きは狩猟における獲物獲得の確率を高める重要な要素であったと思われる。

本事業に関わる発掘調査により、横浜町管内での溝状土坑の検出例も増加しており、それらと周辺地域での検出数を表2に示した。これらから、主軸(長軸)方向だけを注視し大きく東西軸と南北軸に分けてみると、以下のような傾向がみられる。

林ノ脇遺跡の各溝状土坑の主軸方向は、密な一群も散在する一群も概ね真北から僅かに東側に傾く、南北方向を主軸としたものが大多数であり、他に横浜町管内で検出された3遺跡、29基の主軸方向もすべて南北方向である。

六ヶ所村管内の15遺跡・34地点のうち27地点、約7割が東西方向である。600基以上を検出した発茶沢遺跡では、どちらの方向とも捉えられる中間的なものを南北方向に含めても、8割以上が東西方向である。

調査遺跡数が少ない、むつ市管内地域は東西方向軸となるものが多く、東通村管内遺跡は南北方向軸が優位である。

本事業関連で多数の遺跡が調査された、野辺地町管内18遺跡・20地点をみると、東西方向8地点、南北方向11地点と南北方向優位であるものの大きな差はなく、横浜町管内寄りの北部側に位置する、向田(38)～(40)遺跡では大多数が南北方向である。

大まかにみると横浜町管内遺跡の溝状土坑は、周囲の河川に面して直交するように南北方向を主軸として構築されているのに対し、六ヶ所村の吹越烏帽子南麓から南側の湖沼群周辺のもの、湖岸から平行するような配置で東西方向を主軸として構築されるものが多い。このような主軸方向の二分した特徴は、地勢的要因も大きく影響しているものと思われ、その一つが横浜町の東側に位置する金津山、八郎烏帽子、吹越烏帽子で形成された分水嶺で、そこを源とした多数の小河川が構築の際に規範性をもたらす要因となっているものと推測する。

本遺跡より北部地域の溝状土坑の検出例は少ないが、下北丘陵を境に違いが見られる。東通村前坂

下(13)遺跡は29基中24基が南北方向で、21基が小老部川に直交したかたちで構築されており、小河川に面した状態は、横浜町管内遺跡の位置的なあり方と共通する。陸奥湾側むつ市内田(2)遺跡は45基中18基が東西方向、南北方向は12基、中間的なのが15基と混在しているが、三者はほぼ等高線に沿うように構築されている。同遺跡は、田名部平野に位置し河川から距離を置くものの、周辺に溜め池や湧水をもたらす小谷地があり、それを目安に構築されているものと推測される。

概ね、東西方向軸と南北方向軸に大別されるなかで、さらに細かな傾きまで目を配ると、百目木(3)遺跡では真北から西側へ傾くものが多く、本遺跡と吹越(2)遺跡では真北から東側へ傾くものが多い。この違いが何に由来するものか検証は難しいが、獣道のあり方とか、構築時期(年代)および構築者(集団)の違いによるものとして区分せざるを得ない。

旧石器時代の落とし穴は本県では未だ検出されていないが、縄文時代早期以降、円形・楕円形から溝状にその形態を大きく変えながらもその機能は大きく変わらず、人が構築する住居跡などの遺構と遜色はなく、人の食を支えるより重要な役割を担ったものであろう。構築者(集団)の居住域と

の関係もさることながら、その形態変化の時期や、発茶沢遺跡のような大規模な狩猟場が複数の集団の手によるものか、モダシ平遺跡のような広範囲に単一のものの意味や、数十基以上～100基を超える検出数の割に重複が少ない理由や、構築時期と機能期間やメンテナンス等、着目すべき課題は多い。

私的な事ではあるが、溝状土坑については他の遺構と比べ「出土遺物は(ほとんど)ないし単調な土層で掘り下げだけに労力を要する機能も明らかな遺構」という意識が先行してしまい、とすれば発掘がなおざりに成りがちだったように思われる。上記の課題を詳細に把握するためには、安易に掘り下げることなく、遺構周辺および堆積土に対してより注意を払い調査する必要がある。(小田川)

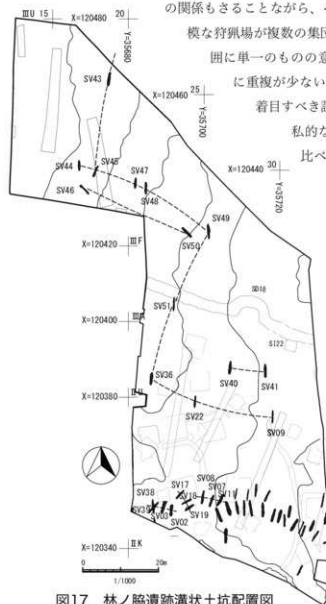


図17 林ノ脇遺跡溝状土坑配置図

第3節 平安時代の出土遺物

土師器

第22号竪穴建物跡・第18号溝跡・遺構外から甕・小型土器（ミニチュア）が出土した。甕は頸部が短く、口縁部が「く」の字状に外反するものと、直線的に立ち上がるものがある。底部は外に張り出すものが多い。器面の摩耗が激しいが、外面は縦～斜位方向のケズリもしくはナデ、内面は横～斜位方向のナデである。胎土中に3mm程度の小礫を含み、焼成は軟質である。小型土器は、胎土の粒子が細かく、小礫を含まない。焼成はやや軟質である。第18号溝跡からは焼成前の貫通孔があるものが出土し、甕の可能性もある。坏は出土しなかった。甕の器形や調整等から、第7期（10世紀後葉）の年代が考えられる（宇部・大野・加藤2014）。2019年度調査で出土した土師器も、ほぼ同様である。

糠文（系）土器

第18号溝跡から1点出土した。端部が受け口状に内湾する口唇部付近で、外面に沈線が2条巡る。胎土は粒子が細かく、小礫を含まない。焼成はやや硬質である。口縁部片のため、胴部等の詳細は不明である。2019年度調査では第21号竪穴建物跡から北奥V類（齋藤2016）のものが出土した。これは10世紀後半～11世紀前半の年代が考えられている。

須恵器

遺構外から1点出土した。五所川原須恵器窯跡群の前期2期（10世紀第1～第2四半期）以降と考えられる（五所川原市教育委員会2003）。2019年度調査では第11号竪穴建物跡から前田野目群と推察される長頸壺の底部が出土した。こちらも前期2期以降の年代が考えられる。

製塩土器

第18号溝跡・遺構外から出土した。口縁部や胴部の傾きから、直線的に外反するバケツ状の器形を呈するものと推定される。外面は輪積痕が明瞭で、内面はナデが丁寧に施されている。胎土は土師器甕に比して粗い。器面・断面ともに二次被熱によって赤褐色をしており、脆い。

土製支脚

第18号溝跡・遺構外から出土した。体部は多角柱状で、支・脚部はほぼ円形である。今回の調査では円柱状のものは出土しなかった。10世紀後半～11世紀後葉の土製支脚は柱状支脚が主体で、円筒状→円柱状→角柱状へ変遷すると考えられており（青森県教育委員会2005a）、2019年度調査の第3号竪穴建物跡（上）出土の円柱状のものは、古い形態である可能性がある。

鉄生産関連遺物

鉄製品・羽口・鉄滓が出土した。鉄製品は刀子の茎や紡錘車の軸の可能性のあるもの、用途不明の円盤状のものが出土した。鉄滓は梔形鍛冶滓・鍛冶滓が出土した。2019年度調査では鍛冶炉を検出している。また、炉内滓・流動滓が出土しており、遺跡内に製錬（製鉄）炉が存在する可能性がある。

第4節 平安時代の集落変遷

今回の調査では1棟の竪穴建物跡を確認した。2019年度調査と合すると23棟を検出したことになる。2019年度調査では、重複関係から竪穴建物跡は小型のものから中～大型に変遷したとしたが、改めて竪穴建物跡の主軸方向とカマドの軸方向から検討する。主軸方向はカマドのある壁面に垂直な軸とした(北東北古代集落遺跡研究会2014)。主軸方向では、大きく3類に分類できる(図18-1)。即ち、ほぼ南向き(A類)・ほぼ南東方向(B類)・ほぼ東向き(C類)である。各類は更に2～4種に細分できる。また、カマド軸方向は4類に分類できた(図18-2)。なお、面積は単純に(長軸×短軸)で算出し、25㎡未満を小型、それ以上を中～大型とした。第22号竪穴建物跡は東壁で主軸方向を算出したが、東壁そのものが不整であるため、南壁の様相からC1としておく。

各類はほぼ小型と中～大型のセットとなっている。竪穴建物跡は、竪穴規模が異なるものが一定の比率で存在することが示されており(宇部2007等)、今回もそれを裏付ける結果となった。特に第15・21号竪穴建物跡、第2・7号竪穴建物跡、第9・11号竪穴建物跡は親和性が高い。なお、B2類は小型の竪穴建物跡のみで構成され、張出し部と長い煙道を有するもので、それが約10m間隔で並ぶ特徴があり、これは他の類型にない特異なものである。竪穴建物跡の重複から、A2→A1、A2→B2、A1→B1、B2→A3の変遷が考えられる。また、遺物の遺構間接合の関係から(表4)、A2→A1→B1→C3→B2→A3→C1→C2と推定される。溝跡のうち、第5号溝はA1類、第4・10号溝はB1類、第1・2・3・7・9号溝はA3類、第13・14・15・16号溝はC1類、第6・17・18号溝はC2類と軸方向が近いので、各時期の竪穴建物跡に付属する区画施設と思われる。第1号竪穴建物跡と第3・7号溝跡で囲まれた空間には、掘立柱建物跡等の施設が付属していた可能性がある。なお、第1・8号竪穴建物跡は柱穴、第3(下)・21号竪穴建物跡は周溝の配置から拡張の可能性が、また、第2号竪穴建物跡はカマド袖掘り方、13号竪穴建物跡はカマド火床面の検出高、18号竪穴建物跡はカマド(火床面)が2基検出されたことから建替の可能性があり、各類型内での竪穴建物跡間に時間差があった可能性は高い。いずれにせよ、竪穴建物跡は遺跡の南端から次第に北に向かって展開していくものと思われ、第18号溝跡と5・14・21号竪穴建物跡が最終段階と考えられる。また、その時点で集落内には埋没途中の窪地が点在し、窪地内に焼土遺構や鍛冶炉を構築したものと思われる。

堆積土中に十和田a火山灰・白頭山一苦小牧火山灰は混入しない、もしくはブロック状に混入することから、竪穴建物跡の構築は白頭山一苦小牧火山灰降下後と考えられる。白頭山の噴火は946年と考えられる(箱崎2021)ことから、10世紀後半の年代が推測される。竪穴建物跡出土の炭化物を炭素年代測定したところ、暦年較正年代(2σ)で第1号竪穴建物跡が10世紀末～中葉・10世紀後葉～12世紀前葉・12世紀中葉、第3号竪穴建物跡(下)が11世紀中葉～12世紀中葉、第15号竪穴建物跡が8世紀後葉～9世紀末・10世紀前葉～中葉、第17号竪穴建物跡(下)が9世紀末～10世紀前葉・10世紀中葉～11世紀前葉、第18号竪穴建物跡が8世紀後葉～9世紀末・10世紀前葉～中葉の年代が得られた(青森県教育委員会2021a)。第3号竪穴建物跡(下)は新しい年代であるものの、それ以外は出土遺物・火山灰の年代とほぼ整合しており、集落の年代は10世紀後半と推測する。

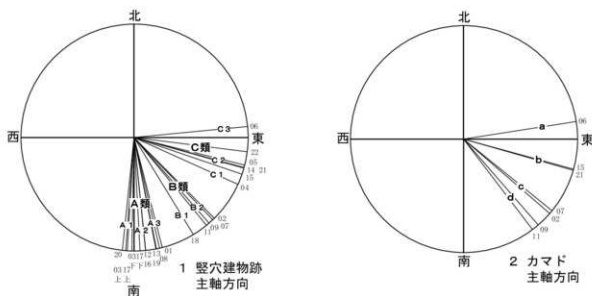


図18 竪穴建物跡の主軸方向およびカマド軸方向

表3 竪穴建物跡一覧

遺構名	規模 (m)	床面積 (㎡)	規格	主軸		カマド軸		重複関係	炭素年代測定 (2σ 暦年代範囲)
				方向	分類	方向	分類		
SI01	711×560×7	39.8	中～大型	S-14.4°-E Pit07 と Pit25 間	A 3			993calAD - 1050calAD (67.5%) 1085calAD - 1125calAD (22.6%) 1136calAD - 1150calAD (5.3%)	
SI02	471×374×47	17.6	小型	S-44.8°-E	B 2	S-49.2°-E	c		
SI03(上)	690×651×31	44.9	中～大型	S-3.4°-W	A 1				
SI03(下)	591×494×11	29.2	中～大型	S-1.1°-W	A 1			1037calAD - 1161calAD (95.4%)	
SI04	349×302×16	10.5	小型	S-65.7°-E (東壁)	C 1				
SI05	(358×333×-)	11.9	小型	S-76.0°-E	C 2				
SI06	342×323×45	11.0	小型	N-84.5°-E	C 3	N-81.1°-E	a		
SI07	363×348×53	12.6	小型	S-43.7°-E	B 2	S-51.0°-E	c		
SI08	656×554×19	36.3	中～大型	S-13.0°-E	A 3			SI08 > SI09	
SI09	487×338×14	16.5	小型	S-41.2°-E	B 2	S-41.0°-E	d	SI09 < SI08	
SI10	557×447×54	24.9	小型	S-39.5°-E	B 2	S-37.3°-E	d	SI11 > SI12	
SI12	(514) × (503) × 17	25.9	中～大型	S-5.9°-E (北壁)	A 2			SI12 < SI11	
SI13	622×624×30	38.8	中～大型	S-11.1°-E	A 3				
SI14	491×407×14	20.0	小型	S-74.4°-E (東壁)	C 2				
SI15	353×347×15	12.2	小型	S-71.2°-E	C 1	S-74.7°-E	b	773calAD - 899calAD (86.3%) 923calAD - 947calAD (9.1%)	
SI16	503×481×15	24.2	小型	S-5.8°-E (南壁)	A 2				
SI17(上)	728×585×41	42.6	中～大型	S-4.2°-W	A 1				
SI17(下)	512×448×7	22.9	小型	S-3.0°-E (北壁)	A 2			898calAD - 925calAD (20.5%) 944calAD - 1018calAD (74.9%)	
SI18	576×558×29	32.1	中～大型	S-31.4°-E	B 1			773calAD - 899calAD (84.9%) 923calAD - 948calAD (10.5%)	
SI19	(311) × (106) × 21	(3.3)	小型	S-11.4°-E (西壁)	A 3				
SI20	377 × (348) × 12	13.1	小型	S-5.9°-W (南壁)	A 1			SI20 < SI18	
SI21	580×545×25	31.6	中～大型	S-74.7°-E	C 2	S-74.1°-E	b		
SI22	296 × (280) × 17	(8.3)	小型	S-82.8°-E (東壁)	C 1				

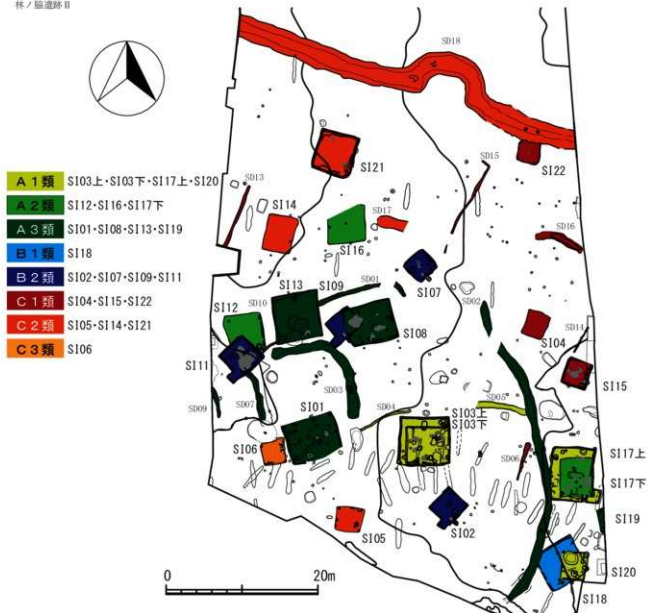


図19 主軸方向による竪穴建物跡および溝跡の分類

表4 遺構間接合遺物一覧

図番号	遺構	層位	図番号	遺構	層位
図46-12-2	SI01	カマド1層	図96-10	SI17(上)	堆積土
	SI07	堆積土		SD02	堆積土
弥生土器	遺構外	耳~田層	SI17(上)	床直	
				・SK08・09堆積土	
図52-1-1	SI02	堆積土 ・カマド堆積土 ・貼床内	SI17(下)	SN08火床面直土 ・床直	
	SI11	床直(P-31)	図103-1	SI18	堆積土・カマド1堆積土
図66-6	SI06	床直	SI08	カマド堆積土	
	SD03	堆積土	図103-4	SI18	カマド2堆積土 ・カマド堆積土
図73-8	SI08	カマド堆積土	SI09	カマド堆積土	
	SI18	カマド1堆積土	SK39	堆積土	
図74-1	SI08	カマド堆積土	図104-5	SI18	堆積土下部
	SI17(上)	堆積土	SK39	堆積土	
図74-2	SI08	カマド堆積土	SI18	カマド1堆積土	
	SN23	周辺堆積土	SI08	カマド堆積土	
図74-4	SI13	カマド堆積土(P-6)	SI13	確認面	
	SI08	貼床 ・堆積土	SK27	堆積土	
図74-6	SI08	カマド堆積土	図132-1	SI17(上)	床面 ・SK04堆積土
	SI09	貼床	SD02	堆積土	
図74-7	SI18	堆積土	SI13	堆積土	
	SI09	堆積土	SD03	堆積土	
図79-1-1	SI11	堆積土 ・カマド堆積土(P-14・16-20) ・SK01堆積土(P-6)	図133-5	SI03(上)	カマド堆積土
	SI06	堆積土1-2層		SI10	堆積土
図79-7	SK24	堆積土	SI17(上)	床面 ・床直	
	SI11	床直(P-2) ・SK05堆積土	SI17(下)	堆積土	
図80-2	SI06	堆積土			
	SI11	堆積土 ・カマド堆積土 ・貼床中 ・SN01堆積土			
図83-1	SI13	確認面 ・カマド堆積土(P-4・5)			
	SI03(上)	堆積土			
図83-11	SD03	堆積土			
	SI13	カマド上堆積土			
図83-11	SD03	堆積土			
	SI17(上)	SK01堆積土			
図96-4	SD02	堆積土			
	SI17(上)	堆積土			
図96-7	SI17(上)	床面 ・床直			
	SI17(下)	堆積土			

第5節 屈曲を有する溝跡

今回の調査で検出した第18号溝跡は、調査区を東西に横断するように延び、中央付近で北側に張り出すように屈曲するのが特徴である。屈曲部の規模は長さ12m・奥行6m程で、溝の南側には幅6m・奥行3m程の空間が生じている。溝跡本体の軸方向はほぼ東北東(S-71°-E)である。堆積土はローム粒や炭化物粒を混合し、壁面・底面付近では混合するロームの粒径が大きく塊状であることから、壁の崩落土層と推測する。それ以外の層は人為堆積(埋戻)土と考えられる。土層A-A'の10層は掘方埋土である。堆積土中に火山灰は認められない。また、ロームが集中する等、土塁構築土の崩落と思われる堆積もなかった。土層観察では、溝跡の重複は認められなかった。遺物は堆積土中から散漫に出土するが、土器、土製品類と鉄製品類は特に屈曲部西側から多く出土した。また、円礫および扁平礫が約420個、堆積土中位から下位にかけて全体的に出土した。礫の約12%に被熱が認められた。機能時期は白頭山-苫小牧火山灰降下以降と考えられ、また、出土土器や遺構の形状・周辺遺構の配置状況等から、平安時代、10世紀後葉のものと思われる。前節の検討から、第5・14・21号竪穴建物跡と共存する、集落の最終段階の遺構と考えられる。堆積土中の炭化物の炭素年代測定からは(第4章第1節参照)、11世紀中頃~13世紀前半・13世紀後半~14世紀後半の年代の分析結果が得られたことから、本溝跡は平安時代以降も埋まりきらずに開口しており、鎌倉時代以降に礫や遺物が混入した土で埋戻しされたと推測される。なお、土層A-A'の3層は緻密で硬化しており、通路痕跡の可能性がある。また、屈曲部西側の堆積土中で確認された焼土は、埋没(埋戻)過程の凹地で形成した可能性もあることから、埋戻しは複数回にわたって行われた可能性が高い。

本溝跡の北側で竪穴建物跡は検出されなかったことから、集落を区画する「壕」としての性格を持ち、屈曲の張り出しは集落の外側を意識していることが窺われる。屈曲部やその周辺からは、柱穴等の遺構や、溝跡の付属施設と思われるものも検出できなかった。土層観察からは、溝の掘り直しはなく、また、土塁も伴わなかったと考えられる。なお、昭和23年(1948)撮影の米軍の空中写真からは、遺跡内で壕と思われる痕跡が確認された(図20)。遺構配置図と合成したところ、調査区にあたる部分では第18号溝跡とほぼ一致した。痕跡の規模は東西180m・南北80m程と推測される。このことから、本遺跡はいわゆる「防衛性集落」であると考えられ、「津軽1類」(三浦1995)に該当するものと思われる。なお、空中写真では、屈曲部脇に壕の痕跡を横断する道路が見える。道路は屈曲部の東脇から屈曲部内側に続き、その前後でほぼ直角に曲がり、クランク状を呈している。この通路は現地割にも合致しており、集落の出入口の痕跡を反映している可能性がある。溝跡は現地割りと一致していないが、調査区内では溝跡の2~3m南に溝跡とほぼ平行して地割りがされており、溝跡の痕跡を踏襲していることが窺われる。

第18号溝跡と同様の屈曲を有する壕・溝跡は、東北町赤平(3)遺跡(第2号壕・青森県教育委員会2007)・八戸市沢里山遺跡(溝跡・八戸市教育委員会1996)でも検出されている(図21・22、表5)。屈曲部の形状や規模は3遺跡ともにほぼ同一で、張り出しが集落の外側であることも共通する。また、溝跡本体の形状・規模、遺物の出土状況も近似している。赤平(3)遺跡では、付属施設(ピット・性格不明遺構)が検出された。また、重複する全ての遺構(現代の溝跡を除く)のいずれよりも新しい。遺跡間は、林ノ脇遺跡-赤平(3)遺跡は約40km・赤平(3)遺跡-沢里山遺跡は約34km・林ノ脇遺跡-沢里山遺跡は約68kmである。



(道の駅よこはま)



想定される溝跡の位置

上段：空中写真 (USA-R1403-50) 下段：空中写真を画像処理・加筆
1/1,000

三保川

図20 米軍写真に見る林ノ脇遺跡

いわゆる「環壕集落」は、陸奥湾沿岸や小川原湖周辺、馬淵川・新井田川流域などといった地域ごとに検討されることが多かったが、それら結び、認識や設計を共通するネットワークが存在していた可能性が想定される。「環壕集落」は、野辺地町(二十平(2)遺跡・向田(35)遺跡等)やむつ市(将木館遺跡・向野(2)遺跡等)といった陸奥湾岸でも確認されている。八戸市や中泊町では等間隔で展開する例があることから(齋藤2007)、横浜町でも、今後更に発見される可能性がある。

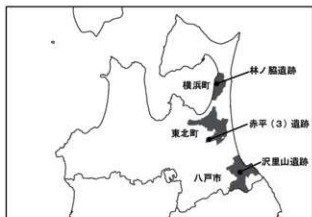


図21 屈曲を有する溝跡・壕跡を検出した遺跡

表5 屈曲を有する溝跡・壕跡一覧

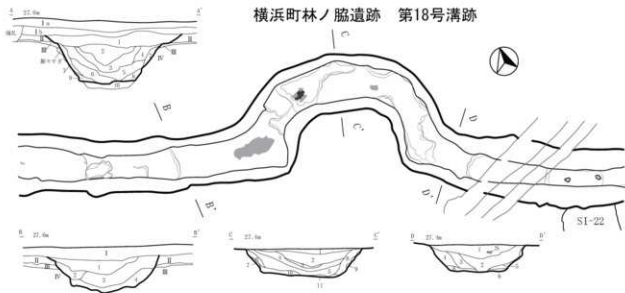
遺跡名 遺構名	規模(m)			屈曲部規模(m)			断面	断面形	堆積状況	遺物出土状況	付属施設
	長さ	幅	深さ	外	中	内					
林ノ脇遺跡 第18号溝跡	47	4.0	1.1	12	6	3	ほぼ平型(屈曲部を境に 双方に緩やかに傾斜)	近台形状	壁面・底面付近:自然堆積 それ以外の層:人為堆積	主に堆積土中 屈曲部内側の遺構 土中で発見を確認	なし
赤平(3)遺跡 第2号壕跡	67	3.7	2	8.5	5.5	6	ほぼ平型	近台形状	中～下層:階高を伴う比較的短期間で の人為堆積 土層:一定範囲をかけた自然堆積 (明跡まで埋まり切らなかった可能性)	底面・底面上の ものは屈曲部を中心 に出土 屈曲部からは炭化 物なども出土	ビッド 性格不明 遺構
沢里山遺跡 溝跡	26	3.1	0.8	12	7	7.5	4.5	陥形～近自 形状	溝中央～両内側:ローム状・ロームゾ ンクが認められるものが多い 北東部:底面に砂の堆積	堆積土中 第1層と第2層の北東 側付近に投棄され た状態で出土	なし

第6節 中世および近世の林ノ脇遺跡

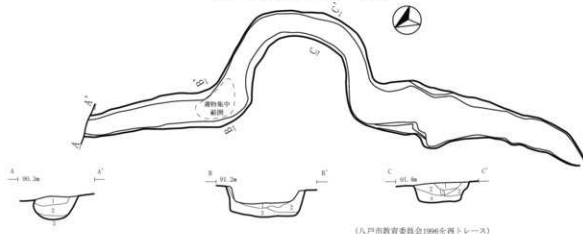
今回の調査では、中世の遺構は検出されず、遺物も遺構外から珠洲産摺鉢1点の出土であった。過去の調査でも中世の遺構は検出されておらず、青磁碗もしくは皿の口縁部(青森県教育委員会2021a)と珠洲産摺鉢(青森県教育委員会2019)が各1点の出土である。前者は平安時代の堅穴建物跡の堆積土中から、後者も遺跡北端部の自然流路中からであり、中世の遺構に伴うものではない。中世の痕跡は遺跡内では希薄である。しかしながら、放射性炭素年代測定で想定される第18号溝跡の埋戻し時期等から、中世の土地利用痕跡が検出面の深さまで至らなかった可能性がある。また、当遺跡は横浜館とは800m程の距離であり、関連する可能性がある。

近世の遺構は検出されなかったが、遺構外から陶磁器が出土した。その中で赤絵の碗と灯火受付皿が目目される。赤絵は高級品とされる。また、土器の灯火受付皿は江戸でも郊外では出土しないとされる(長佐古1993)。近世の「横濱村」は陸運や海運の要所で、遺跡は現在の六ヶ所村泊まで続く道路沿いでもある。村の郊外ではあるものの、遺跡内もしくは周辺に、一般とは異なる性格の建物・施設が存在した可能性がある。(平山)

横浜町林ノ脇遺跡 第18号溝跡



八戸市沢里山遺跡 溝跡



東北町赤平(3)遺跡 第2号壕跡

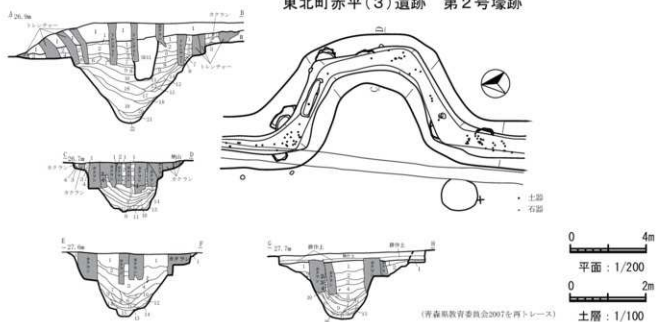


図22 屈曲を有する溝跡・壕跡集成図

引用・参考文献

- 青森県教育委員会 1973 『むつ小川原開発予定地域内埋蔵文化財分布調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書 第1集
- 青森県教育委員会 1982 『発茶沢遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書 第67集
- 青森県教育委員会 1983 『青森県の中世城館』
- 青森県教育委員会 1986 『田名部道』青森県「歴史の道」調査報告書
- 青森県教育委員会 1989 『発茶沢(1)遺跡IV』青森県埋蔵文化財調査報告書 第120集
- 青森県教育委員会 1994 『青森県遺跡詳細分布調査報告書VI』青森県埋蔵文化財調査報告書 第165集
- 青森県教育委員会 2002 『野辺地蟹田(10)遺跡、向田(30)・(31)遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書 第319集
- 青森県教育委員会 2003 『野辺地蟹田(10)遺跡II 野辺地蟹田(12)遺跡 向田(34)遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書 第343集
- 青森県教育委員会 2005 『大沢遺跡II』青森県埋蔵文化財調査報告書 第386集
- 青森県教育委員会 2005 『林ノ前遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書 第396集
- 青森県教育委員会 2007 『赤平(2)遺跡 赤平(3)遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書 第438集
- 青森県教育委員会 2019 『青森県遺跡詳細分布調査報告書31』青森県埋蔵文化財調査報告書 第605集
- 青森県教育委員会 2020 『青森県遺跡詳細分布調査報告書32』青森県埋蔵文化財調査報告書 第615集
- 青森県教育委員会 2021a 『林ノ脇遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書 第620集
- 青森県教育委員会 2021b 『百目木(3)遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書 第622集
- 青森県教育委員会 2022a 『吹越(2)遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書 第628集
- 青森県教育委員会 2022b 『青森県遺跡詳細分布調査報告書34』青森県埋蔵文化財調査報告書 第632集
- 青森県教育委員会 2023 『林ノ脇遺跡III』青森県埋蔵文化財調査報告書 第634集
- 青森県史編さん近現代部会 2002 『青森県史 資料編 近現代1』
- 青森県史編さん近世部会 2001 『青森県史 資料編 近世1』
- 青森県史編さん近世部会 2003 『青森県史 資料編 近世4』
- 青森県史編さん考古部会 2003 『青森県史 資料編 考古4 中世・近世』
- 青森県史編さん考古部会 2005 『青森県史 資料編 考古3 弥生～古代』
- 青森県史編さん中世部会 2004 『青森県史 資料編 中世1』
- 青森県文化財保護協会 1965 『新撰陸奥国誌』第四巻 みちのく双書第18集 青森県文化財保護協会
池谷信之 2019 「愛鷹・箱根山麓の旧石器時代陥し穴」『月刊考古学ジャーナル』No.734 ニュー・サイエンス社
- 宇部則保 2007 「本州北縁地域の蝦夷集落と土器」『9世紀の蝦夷社会』奥羽史研究叢書9 高志書院
- 宇部則保 2010 「9・10世紀における青森県周辺の地域性」『古代末期の境界世界』法政大学国際日本学研究所
- 宇部則保 2019 「古代津母の地域様相—蝦夷社会拠点形成の道筋—」『北奥羽の古代社会—土器変容・堅穴建物と集落の動態—』高志書院

- 宇部則保・大野 亨・加藤隆則 2014 「5. 下北・上北・三八地区」『9～11世紀の土器編年構築と集落遺跡の特質からみた、北東北世界の実態的研究』北東北古代集落遺跡研究会
- 大橋康二 1993 『肥前陶磁』考古学ライブラリー55 ニュー・サイエンス社
- 北東北古代集落遺跡研究会 2014 「9～11世紀の土器編年構築と集落遺跡の特質からみた、北東北世界の实態的研究」北東北古代集落遺跡研究会
- 九州近世陶磁学会 2000 『九州陶磁の編年—九州近世陶磁学会10周年記念—』九州近世陶磁学会
- 五所川原市教育委員会 2003 『五所川原須恵器窯跡群』五所川原市埋蔵文化財調査報告書 第25集
- 齋藤 淳 2007 「北奥における生産活動の地域性について」『古代蝦夷からアイヌへ』吉川弘文館
- 齋藤 淳 2016 「北東北の擦文(系)土器」『一般社団法人日本考古学会2016年度弘前大会第Ⅱ分科会「北東北9・10世紀社会の変動」研究報告資料集』日本考古学会2016年度弘前大会実行委員会
- 佐藤宏之 2001 「縄紋時代の陥し穴」『月刊考古学ジャーナル』No.468 ニュー・サイエンス社
- 社団法人岩手県文化財愛護協会 2002 『読み下し文北奥路程記』社団法人岩手県文化財愛護協会
- 白石浩之 2001 「旧石器から縄文時代の狩猟」『月刊考古学ジャーナル』No.468 ニュー・サイエンス社
- 関根連人・木戸奈央子 2018 「越後産焼酎徳利(「松前徳利」)の生産と流通」『中近世陶磁器の考古学』8巻 雄山閣
- 角鹿扇三・渡辺兼庸 1980 『角鹿扇三 蒐集考古学資料集』
- 長佐古真也 1993 「『受付き灯明皿』にみる生産と流通—受皿の型式分類と数量把握を通して—」『東京都埋蔵文化財センター研究論集』XII 東京都埋蔵文化財センター
- 中村信博 2019 「縄文時代に追い込み陥し穴脈は行われたか」『月刊考古学ジャーナル』No.734 ニュー・サイエンス社
- 南部叢書刊行会 1929 「邦内郷村志」『南部叢書』第5冊
- 箱崎真隆 2021 「年輪年代学の現在」『樹木・木材と年代研究』国立歴史民俗博物館研究叢書8 朝倉書店
- 八戸市教育委員会 1996 『沢里山遺跡』八戸市埋蔵文化財調査報告書 第67集
- 福田友之・工藤清泰・木村浩一 1986 「南部町聖寿寺館・十和田湖町三日市館・横浜町牛ノ沢館跡等発見の陶磁資料」『弘前大学考古学研究』第3号 弘前大学考古学研究会
- 福田友之 2018 「第1章おとし穴・鯨類—第3節下北半島尾駁・鷹架沼周辺の溝状土坑群」『東北北部先史文化の考古学』同成社
- 藤原秀樹 2019 「北日本の動物相と陥し穴」『月刊考古学ジャーナル』No.734 ニュー・サイエンス社
- 三浦圭介 1995 「北奥・北海道地域における古代防衛性集落の発生と展開」『国立歴史民俗博物館研究報告』第64集 国立歴史民俗博物館
- 八木光則 2010 「古代末期の北奥蝦夷社会」『古代末期の境界世界』法政大学国際日本学研究所
- 吉岡康暢 1994 『中世須恵器の研究』吉川弘文館
- 吉田武三編 1969 『東奥沿海日誌』時事通信社
- ※表2記載の青森県教育委員会刊行「青森県埋蔵文化財調査報告書」および野辺地町教育委員会刊行「野辺地町文化財調査報告書」のうち、上記以外のものは紙幅の都合により割愛した。



遺跡空中写真（北→）



遺跡空中写真（東→）

写真1 遺跡空中写真



調査前状況 (北→)



作業状況 (南東→)



作業状況 (南→)



作業状況 (北西→)



第47号溝状土坑 精査状況 (南→)



第22号竪穴建物跡 精査状況 (東→)



第18号溝跡 精査状況 (東→)



第18号溝跡 精査状況 (西→)

写真2 作業状況(1)



第18号溝跡 精査状況 (西→)



第18号溝跡 精査状況 (東→)



第47号溝状土坑 土層 (南→)



第47号溝状土坑 完掘 (南→)

写真3 作業状況(2)・溝状土坑(1)



第48号溝状土坑 土層 (南→)



第48号溝状土坑 完掘 (南→)



第49号溝状土坑 土層 (南→)



第49号溝状土坑 完掘 (南→)

写真4 溝状土坑(2)



第50号溝状土坑 土層 (南東→)



第50号溝状土坑 完掘 (南東→)



第51号溝状土坑 土層 (南→)



第51号溝状土坑 完掘 (南→)

写真5 溝状土坑(3)



完掘（東→）



A-A'土層（南西→）



B-B'土層（南西→）



C-C'土層（南西→）



土師器（図6-12）出土状況

写真6 第22号竪穴建物跡



完掘 (東→)



完掘 (西→)



完掘 (北→)

写真7 第18号溝跡(1)



遺物出土状況（東→）



遺物出土状況（西→）



遺物出土状況（南西→）



遺物出土状況（北西→）

写真8 第18号溝跡(2)



A-A'土層 (南西→)



B-B'土層 (南西→)



C-C'土層 (南西→)



D-D'土層 (南西→)



E-E'土層 (南西→)



F-F'土層 (南西→)



G-G'土層 (南西→)



土製支脚(図12-2)出土状況

写真9 第18号溝跡(3)



写真10 遺構内出土遺物(1)



写真11 遺構内出土遺物(2)・遺構外出土遺物(1)

遺構外



写真12 遺構外出土遺物(2)

報告書抄録

ふりがな	はやしのわきいせきに							
書名	林ノ脇遺跡II							
副書名	国道279号横浜北バイパス道路改築事業に伴う遺跡発掘調査報告							
巻次								
シリーズ名	青森県埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第633集							
編著者名	平山 明寿 小田川 哲彦							
編集機関	青森県埋蔵文化財調査センター							
所在地	〒038-0042 青森県青森市新城字天田内152-15 TEL.017-788-5701							
発行機関	青森県教育委員会							
発行年月日	2023年3月15日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		世界測地系 (JGD2011)		調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	北緯	東経			
はやしのわきいせきに 林ノ脇遺跡	青森県上北郡 横浜町字太郎 須田	02406	406018	41° 05' 01"	141° 15' 28"	20210511 ～ 20211008	2,000㎡	記録保存 調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
林ノ脇遺跡	狩猟場	縄文時代	溝状土坑	5	縄文土器・石器		集落の境界を示す屈曲 を有する溝跡の検出	
	集落跡	平安時代	竪穴建物跡 溝跡	1 1	土師器・須恵器・ 擦文(系)土器・ 製塩土器・ 土製支脚・ 鉄製品(刀子等)・ 鉄滓・羽口			
	散布地	中世以降			陶磁器			
要約	<p>林ノ脇遺跡は、道の駅よこはまの東隣、三保川右岸の標高25～27mの段丘上に立地し、遺跡の南端は三保川の谷底平野に臨む急崖となっている。令和元年度に当センターが発掘調査を行っており、縄文時代早期前葉の土坑と遺物集中地点、縄文時代中期後葉～後期前葉の溝状土坑、弥生時代後期の竪穴建物跡の他、平安時代の竪穴建物跡を多数検出した。</p> <p>今回は前回調査区の北側に接する部分を調査し、縄文時代の溝状土坑と平安時代の竪穴建物跡や大型の溝跡を検出した。また、縄文時代の土器・石器、平安時代の土師器・須恵器・石器・鉄製品・鉄滓などが出土した。</p> <p>今回の調査から、縄文時代の狩猟場が三保川の岸際からさらに遺跡の北側に広がっていたことが判明した。平安時代では、集落の北端が明らかになった。集落の境界を示す溝跡に見られた屈曲は、東北町赤平(3)遺跡や八戸市沢里山遺跡でも検出されている。3遺跡の溝跡(壕跡)は形状・規模ともにほぼ同じで、地域間を結ぶネットワークの存在が推測される。</p>							

青森県埋蔵文化財調査報告書 第633集

林ノ脇遺跡Ⅱ

— 国道279号横浜北バイパス道路改築事業に伴う遺跡発掘調査報告 —

発行年月日 2023年3月15日
発行 青森県教育委員会
編集 青森県埋蔵文化財調査センター
〒038-0042 青森県青森市新城字天田内152-15
TEL 017-788-5701 FAX 017-788-5702
印刷 株式会社東奥アドシステム
〒038-0862 青森県青森市古川1-21-12
TEL 017-776-3771 FAX 017-776-3775

この印刷物は300部作成し、印刷経費は1部あたり3,331円(うち県負担1,499円)です。